

『狗張子注釈』(四)

江 本 裕 編

本注釈は、『狗張子』注釈(一)・(二)・(三)、『大妻女子大学紀要—文系—』31・32・33、平成11年3月・平成12年3月・平成13年3月に続くものである。大妻女子大学院(修士・博士課程)の近世専攻の院生を中心に輪読してきたものを基にしたもので、そのメンバーは市毛舞子(博士課程一年)、飯野朋美(修士課程一年)、佐藤笑子(修士課程一年)、本澤郁枝(修士課程一年)の四名である。各人の礎稿を討議し、最終的に江本が閲読した。従って最終的な文責は江本にある。今回は第五巻だけであるが、以後も逐次検証していく予定である。なお、目録は巻頭部に総目録(第一―七巻)が付されているが、今回は第五巻のみを載せた。

凡例

- 一 底本には、便宜、大妻女子大学所蔵の後印本を用いた。
- 一 校訂にあたっては、原本の面目をできる限り保てるようにつとめたが、通読の便を考慮して、次の方針に従った。
- イ 本文に適宜段落を設けた。
- ロ 句読点は極力原文の調子を生かすようつとめたが、若干私に改

めたところもある。

- ハ 漢字については、常用漢字表にあるものは、原則として現在通用の字体に改めた。残した略体字・異体字のうち、必要と思われるものには後注に典拠を示した。その際『節用集』『下学集』等の古辞書を利用した。
- ニ 仮名遣い・漢字の振り仮名は原文の通りにし、著しく通則からはずれているものは後注に記した。また、原文には無いが必須と思われる振り仮名を「 」に入れて補い、左訓は当該字の下に「 」を施して入れた。
- ホ 仮名の清濁は私に補正した。
- ヘ 誤字・誤刻・衍字と認められるものも原文通りに示し、後注でその旨を示した。
- ト 挿絵は省略した。
- 一 後注は簡略を旨とした。なお、後注の引用文はよみやすい便を図り、原表記に従っていないところがある。
- 一 出典の略称
- イ 節用集は原則として「易林本」「書言字考」等とした。
- ロ その他の資料は各話の初出箇所を正式名称を記し、以後は適宜略称を用いた。
- 一 末尾に既出の出典を記し、他に気づいたものがあつた場合はこれ

を加えた。なお、中国の作品で、典拠と指摘されるものに限り、簡単な粗筋を付した。本文における略称の詳細は以下の通りである。

〈山口〉……山口剛『怪談名作集』（『日本名著全集』日本名著全集刊行会、昭和2・10）解説。

〈麻生〉……麻生磯次『江戸文学と支那文学』（三省堂、昭和21・8）初出。（再版以後『江戸文学と中国文学』と改題。）

〈富士1〉……富士昭雄「浅井了意の方法―狗張子の典拠を中心に―」（『名古屋大学教育学部紀要』昭和42・3）。

〈富士2〉……富士昭雄「伽婢子と狗張子」（『国語と国文学』昭和46・10）。

〈富士3〉……富士昭雄「狗張子」典拠統考」（『日中語文交渉史論叢』桜楓社昭和54・4）。

若草書房、平成12）。

第五卷

今川氏真没落付三浦右衛門最後の故

常田合戦甲州軍兵幽霊の事

男郎花

掃部新五郎遁世捨身の事

宥快法師柳岡孫四郎に愛着して蝟となる事

杉谷源次付男色の弁

狗はりこ巻之五

○今川氏真付三浦右衛門最後

*駿河国*今川義元は*織田信長公に討た、その子息*氏真その跡をつぎ、国を守りて恙なかりし所に、*永祿の初年より家風ことの外にをとりへ、武道の事はすたれて風流の奢をきわめ、*武藤新三郎とて、*白面の仮幸あり。氏真限りなく愛まどひて、日夜席を同じして、酒宴遊興に月をわたり、乱舞淫楽に年を送り、和哥の道、鞠のたはふれにいとまなし。新三郎漸やく成長しければ、三浦右衛門佐になされ、又茶湯の会をくはたて、*風顛山居の幽景をしたひ、*路次か、り築山のありさま、*泉水の遣水、うえ木の枝つきまで、*か、りあれと作りなし、三浦が心にかなふをもつてよろこびとし、和泉の境に聞えし*紹鷗がもちたる*高麗茶碗を三千貫に買とり、連歌の名匠*宗祇のひさうせし*白晷の香爐を五千貫を出してうけ求め、その外*夢想国師の*天龍寺の青蘆の花入、*忍性上人の鎌倉の柿色の*真壺、あるひは*茄子の肩衝、緑葉の*香合又は*香匙*火筋卓机にいたるまで、唐の日本の名物とだにいへば、財宝を惜まず買もとめ、綾錦を裁縫て袋とし、*沈檀*玳瑁をけづり*瑩きて*室とす。そのつゝゆる所いく千万とも限りなし。天より降にもあらず、地より湧にもあらず、土民百姓をむさぼり、*賦斂おもく*課役しげく、責とり*虐取て積あつめ、これをちらしつかふ事*砂をまくがごとし。*譜代忠功の侍といへとも、少の科あれば、*所領をささへ職を追あげ、家中の制道、内外の事共、みなこれ三浦がはからひにてありしかば、權威高く*か、やき、上下飽はへて、大かたもてあつかふてぞおぼえける。三浦が申す旨に依て、*武田信玄のためには氏真はまさしき甥ながら、中あしくなり、今川の老臣*朝比奈兵衛大夫と三浦右衛門佐と心よからず、諸侍みな三浦をにくみうとみけるほどに、武田がた此有さまを見すかし、*永祿十年十二月六日武田信玄三万五千よ騎にて駿府にをしよせらる。氏真聞つけて、*庵原左馬頭を*先手として、*岡部*小倉七千よ騎、氏真は二万五千よ騎を率して出向はれしに、朝比奈心、変りして引入しかば、諸陣何とはしらず引はらひて*駿府に帰る。氏真の*旗本色を失なひ、落支度をいたせしかば、力なく*清見寺の本陣皆く

つれて、*府中に帰られけり。諸侍みな色をたて、別心をおこし、たがひに目を見合せ、一言の評儀にも及ばず、只今敵のよするにも、防がんとおもふ*義勢もなし。氏真は城にこもりて、打死せんと思ひ切給ふ所に、三浦申けるやうは、*砥城の山家へ引こもり、時をまちて軍をおこし、本意をとげ給へと申す、むるに依て、*小原備前守*朝比奈備中守*長谷川次郎左衛門等がはからひにて、わづかに五十騎はかりにて、*懸川の城に入給ふ。城中七千騎、いづれも聞ゆる*兵共どもなり。武田がたその跡にをしかけ、*駿府の館に火をかけしに、折ふし嵐はげしく吹て、雲煙とやけあがる。さしも年比つくりみがきし、*大厦のかまへ、一時に灰燼と成はてたり。

次の日、御館の焼跡にかくぞよみて立たる。

*甲斐もなき大僧正の官賊が

欲にするがのをいたすすみよ

三浦衛門は一朝に威をうしなひ、*軍といふ事のおそろしさに、手ふるひ足わななき、物の心も弁まへず、鎧甲馬物のぐきらびやかに、氏真とつれて、駿府の城をは出たりしかども、ゆくさき道せはく、いかにもして身をかくし、命をたすからばやと思ひ、さしも重恩をうけたる主君を打すて、只一人*かけおちしたり。世が世の時にこそ、駿河・遠江・参川のあひだには、いか成*大身*旧功の輩も、三浦にむかひては*手をつかね腰ををり、媚諂らひ機をとり色をうかひしに、*数年の積悪こゝにあらはれ、*天に背くまゝ、地にぬきあしすといふがごとく、世を忍び人にかくれ、雷をいたゞきて江をわたり、薪を負て焼野を通るおそれをなし、馬をはやめて通る所に、すはや落人の行ぞと呼はりしかば、村々より出あふ百姓ども、*垢たる鎗長刀をもちつれてはしりよる。これは三浦右衛門ぞ、あやまちすなとこと葉をかくれば、何条その三浦をとらへて、*年比のうらみを思ひしらせよといふ。只剥むくりて赤裸になし、突出して恥をさらさせよといふ。*前後*とりまはし、己年來主君の寵にほこり、百姓をむさぼり、我らの妻子、家財までも*沽却せさせ、責とりこきとり、ある時は*責

巻水牢、ある時は*打擲*蹂躪、又は*人夫をさしてつらめしく責つかひしそのむくひは、来世までもなく、こゝにて思ひしらせ、なぶくりこしにせよやとて、馬より引おとし、鎧甲下の小袖まで*引むくり剥とり、*赤裸になしければ、三浦は百姓どもにむかひ手を合せ、その小袖ひとつは得させてたべといふ。わかき者どもは*しやつに物ないはせそ、*高手*小手にくゝりあげ、木のもとに結つけて、おもふまゝに打ころせとの、しりけるを、年よりたる者どもはかはゆげに、さのみはなせそ、只ゆるして追やれとて繩をときてつきはなす。三浦は命計はたすかりけれども、赤はだかなりければ、破れたる菅笠を前にあて、ちぎれたる*古薦を腰にまとひ、泣々夜もすがら道にもあらぬ田の畝をつたひ、そこともしらぬ山路をたどれば、手は荊にかきさき、足は石に蹴破り朱になりて、やうく三川の*高天神の城にか、ぐりつきて、*小笠原与八郎を頼みけり。与八郎はじめのほどは、*世の変をうかゞひ、三浦を呼いれ、小袖刀脇指まで出しあたへ、暫らくいたはる躰にもてなしけるが、氏真すでに懸川を*開のきて*小田原へ行つ、*人数ちりくゝに成しと聞えしほとに、小笠原与八郎たちまちに*心変わり色に出たり。*城飼那を押領し三浦右衛門を*からめとり、とし月わがま、をはたらき、*諸人に*慮外無礼をいたし、*士民を困窮せしめ、傍輩の諸侍一門の貴族といへども、己が心に叶はねば、*知行ををさへ*職を打あげ、*凡下のものをもわが*機に入ぬれば*取たてつ、君をくらまし家を*みだり*上下恨みをふくむ事いふ計なし。今すでに主君の運かたぶき、国家ほろぶるにいたりて、恩をわすれ君を見はなし、天地仏神の*冥慮にはづれ人望にそむく、*悪逆無道の恥しらずを*命いけてをき*娑婆ふさげになさんよ、疾して冥途につかはし、閻魔の裁許にまかせんとて人夫どもに仰せて*広庭に引出させければ、三浦右衛門大におどろき、是はそも*情なきはからひかな、親とも兄とも頼入てこそ思ひしに、せめて命計はたすけ給へとて、*霰のごとくなる涙を雨の如に流して*よばひさけび歎きければ、小笠原が侍*足助長七といふもの*切手にて傍に立

より、さらば何とぞ申いれて、命ばかりはたすけてとらすべし。その代には、*鼻をそぎ片耳を切て許すとも、それとても命が惜きかと思ければ、たとひ耳鼻をそがれてなりとも、命をだにたすけられなば、限りなき御恩なるべしとこたへたり。

是を聞ける人、悪き奴が*心はせかな、あのきたなき根性故にこそ重恩の主をすて、これまでは落来りけれ。とく首はねて不忠ふ義の*佞臣のこらしめにせよやといへば、三浦右衛門*身をもみ足ずりして*声をはかりに啼きけび、おきふし歎きけるを最後は只今ぞ、念仏申せといへども、前後ふかくに取みだして太刀のあて所も定まらず、*太刀取も不敏ながら*うつぶきに踏倒し、*搔首にぞしたりける。死骸を野べにすてたりければ、鳶鳥あつまり、眼をつかみはらわたを啄ばみ、犬狼むらがりて、手足を引ちらし*完をあらそふ。*往来の人は是を見ては、哀とはいわずして、因果のむくひはかくこそあらめと、*弾指して打通る。

運に乗じて威をふるふ時は大龍の雲にのぼり猛虎の風に*嘯がごとく成しも、一旦に*果報尽て、屍を草むらにさらし、恥を残すこそ哀なれ。

○駿河の国 駿州。現在の静岡県の中東部、大井川以東、伊豆半島を除く地域に位置する。○今川義元 永正十六年〜永禄三年（一五一九〜一五六〇）。戦国時代の守護大名。治部大輔。父は今川氏親、母は中御門宣胤の女。天文六年（一五三七）、従来敵対関係にあった甲斐の武田氏と結び、武田信玄の女をめとった。永禄三年（一五六〇）、桶狭間で織田信長の奇襲にあい、討死した。四十二歳。なお、氏真の母方の祖父中御門宣胤（一四四二〜一五二五）は、一条兼良から『古今集』の講義を受け、公家の和歌・連歌の会に参加している。（『国書人名辞典』）

○織田信長公 既出。卷一―三。天文三年〜天正十年（一五三四〜八二）。戦国・安土桃山時代の有力な武将。父は尾張下四郡を支配する清

洲城の織田家の家老織田弾正忠信秀。天正十年、本能寺において明智光秀の襲撃をうけて自刃。四十九歳。○氏真 天文七年〜慶長十九年（一五三八〜一六一四）。天文七年義元の子として生まれる。母は武田信虎の女。永禄元年（一五五八）すでに駿河にその発給文書がみられ、国務の一部を委ねられていたが、同三年父義元の討死により家督を相続した。しかし氏真にとって、桶狭間の敗戦の打撃は大きく、退勢をたてなおすことはできず、わずか七年足らずで領国駿河・遠江・三河を奪われ今川氏は滅亡するに至った。東海一の名門の家に生まれながら家を滅亡させた暗愚な君主として、いろいろな挿話が伝えられるが、連歌・和歌に秀で、特に蹴鞠は名人の域に達していたと伝える。氏真の死後、孫の範英が跡目を継いだ。○永禄の初年 「永禄」は一五五八年より。○武藤新三郎 後の三浦右衛門佐。？〜元亀元年（？〜一五七〇）。氏真の寵臣。氏真の老臣三浦次郎右衛門の養子。実は大原備前の守の子で、もとは武（無）藤新三郎と称して、氏真に近侍。氏真の没落後、実父備前守の居城、駿河花沢城（現焼津市高崎）にあったが、元亀元年（一五七〇）、武田信玄に攻略され敗走。遠江馬付塚の小笠原長忠（遠江高天神城主）を頼るが、長忠により父とともに殺害される（『戦国人名事典』）。長忠に関しては、後出「小笠原与八郎」参照。○白面の佞幸 「白面」は色白の顔で多くは若い男子をいうことが多い。「佞幸」はこびへつらつて寵をうる者。○風顛山居の幽景をしたひ 風流な事に身をいれて幽遠な様子を希求し。○路次かゝり 茶室の庭の造り。○泉水の遣水 「泉水」は庭先につくられた池で、「遣水」は寢殿造りで外から引き入れて庭面に作った流れ。○かゝりあれと作りなし このような形がいいだろうと作らせ。○紹鷗 生没年一五〇四〜一五五五 室町時代後期の人。和泉国堺（現大阪府中部）の生まれで、千利休にその術を伝えた。「今川家の人々、心持あしくなり、そでなき事に物を入れ、境の紹鷗が流の茶ノ湯がかりなりとて、茶碗一ツを三千貫にて買取、棠花にふけり申候は、三浦右衛門がしわざなり」（『甲陽軍鑑』品三十四）。○高麗茶椀 朝鮮、李朝時代（一三九二〜一九一

○) に作られた碗形陶器。茶碗など朝鮮の雜器を転用したものと、日本の茶人の注文によって作られ輸入されたものに大別できる。○宗祇 一四二一〜一五〇二。室町時代の連歌師、和学者。○白鼻の香櫃 「香櫃」は香をたくための容器。「白鼻」は水鳥(大漢和)。諸節用集等用例未確認。○夢想国師 「夢想」は「夢窓」。夢窓疎石。一二七五〜一三五二。南北朝時代の禅僧。後醍醐天皇の知遇を得て南禅寺に住す。のち足利尊氏の帰依を受け、天竜寺を開山した。五山文学の最盛期をその門流に生み出し、庭園芸術を發展させ、天龍寺による貿易を促した。○天龍寺の青磁の花入 「青磁」は、中国・明初期の浙江省窯の青磁。室町時代、天龍寺船によって輸入されたところからの称。「花入」は花をいける器。○認性上人 一二一七〜一三〇三。鎌倉後期の律宗の僧。道路、橋を修営・架設し、また貧民病人の救済に努めた。○真壺 抹茶に使用する葉茶を蓄える茶壺で、舶来物。○茄子の肩衝 なすに形が似ていることから、茶入れの一種。口元がすぼみ、胴がふくらんだ形のもので、数少なく、唐物の最上級とする。○香合 「こうこう」ともいう。おもに薫物(練物)を入れる容器。材質や形にいろいろな意匠が凝らされたものがある。○香匙 香をすくうさじ。○火箸 香を香盤につぐのに用いる木の柄のついた火箸。「火箸 コシ」(春林本下学集)。「火箸 コジ」(前田家本・榊原本下学集)。○沈壇 沈木と壇木。ともに香木。○玳瑁 ベっこう。甲財は古来中国において装飾品の珍宝とされ、わが国ではまれに舶来した物が珍重された。○瑩きて 「瑩エイ ミガク カ、ヤク」(慶長十五年版倭玉篇)。○室(いゑ) 小さい道具をいれておく箱のこと。茶道では茶人の器類の容器。○賦斂 税を割り当てとりたてること。「たゞ百姓をむさばり、賦斂をおもく、課役を茂くして」(「伽婢子」卷一一二)。○課役 労役をわりあてること。○虐取 「虐 ハタル 徴 同」(書言字考)。○砂 「沙 イサゴ 砂 同」(書言字考)。○譜代忠功の侍 代々その家に仕え、主君に忠義をつくし功績をあげた侍。○所領 領有すること。またその土地。「Xorio ショリヤウ」(日葡)。○かかやき 「Cacayagi-utata」

(日葡)。○武田信玄 既出。卷一―三。四―三。永正十八年から元龜四年(一五七三)。戦国時代の武将。甲斐の国からおこり、のち信濃、駿河、西上野、飛騨、東美濃、遠江、三河を支配。○朝比奈兵衛大夫 諱信置(一五二八〜八二)。義元・氏真に仕え、永禄十一年(一五六八)、武田信玄の駿河侵入に際して信玄に与した。用宗(持舟)城を守り、武田方の駿河先方衆の一人に数えられ、百五十騎の侍大将となっている。その後、庵原山城(現清水市庵原町草ヶ谷)の城番となり、修築など行なつたが、天正十年(一五八二)、武田勝頼の滅亡とともに庵原山城を退き、庵原館で子信重とともに自刃。(「戦国大名家臣団事典」)。「今川両家老は三浦、朝比奈なり。……義元戦死の時、……庵原をはじめ二十一人一戦に及ばず敗北の故、其の身も面目なく存じ、氏真も遺憾にみえ、双方上下の間不和にして、小倉内蔵助、三浦右衛門権をほしいままにし、国政を司りて、旧臣皆退く。故に一門旧臣ごとく武田に属して、今川遂に滅亡す」(「武家事紀」諸家家臣伝)。「永禄十年十二月六日 永禄十年は一五六七年、『甲陽軍鑑』品三十四に「永禄十一年戊辰年十二月六日、戊の刻に、信玄甲府を御立なされ」とあり、他、「永禄十二年(戊辰)十二月十二日、武田信玄ついに駿州に発向す」(「武家事紀」諸家家臣伝)、『当代記』も「永禄十一年戊辰」とする。○庵原左馬頭 安房守忠胤。「庵原安房守は今川家人。戦功尤も多し。義元戦死の後、氏真武事に倦み、此れにより武田信虎ひそかに瀬名刑部大輔、三浦与市、葛山備中守、朝比奈兵衛尉并武田上野介を催して駿府を襲わんとす。此の事あらわれ、庵原忠勤を以て信虎を放逐し、関口(瀬名也)を害す。其の後武田信玄駿河に乱入の時、庵原薩埵山に陣して信玄に対すといえども、家の老臣皆反く。……氏真小田原へ逃るる後、武田家に降す」(「武家事紀」諸家家臣伝)。○先手 既出。卷四―三 味方の先頭に立って、敵陣に攻め入る軍勢。○岡部 岡部忠兵衛直現。のち土屋豊前守貞綱。今川家没落後は、信玄に降る。岡部・小倉は大將分。「岡部忠兵衛・小倉内蔵介、両人大將分にして、今川家の十八人衆として武篇覚の兵共なり」(「甲陽軍鑑」品三十

四)とされる。○小倉 小倉内蔵助勝久。○駿府 駿河国の城下町。現静岡市中心部。「府中」とも。○旗本 主将が直接に指揮する軍勢。本隊。また、その本陣の警護を行なう軍勢。○色を失なむ [Itouo vimo 顔色を失う] (日葡)。○清見寺 静岡市清水市興津清見寺町にある寺。臨濟宗妙心寺派。永祿十年十二月十二日、武田軍乱入以降は、今川・武田・北条氏が乱れて当寺を本陣として使用し、同十二年から天正十年(一五八二)まで武田氏の統治下におかれた。○府中 現在の静岡市中心部。南北朝時代から使われた駿府の別称。○義勢 見せかけのいきおい。○砥城の山家 砥城は地名。戦国史料叢書所収の『甲陽軍鑑』注では砥城又は土岐で、志田郡徳山村にあり、静岡の西八里にあるとする。また「砥城」は、鶴氏をさすか。鶴氏は静岡県榛原郡中川根町にある徳山城を築いた在地土豪で(『日本城郭大系九』)、通説では、信玄の大軍に攻められた氏真は、安部川を越えて羽鳥の建徳寺に逃れそこから藁科川を溯行し、伊久美郡の犬間城に入り、さらに徳山郷堀之内の土岐一族の拠る徳山城を経て、遠江の水川(榛原郡中川根町)から掛川城に入ったとする。(『戦国合戦大事典』)。○小原備前守 小原肥前守鎮実。元亀元年花沢城に籠り信玄に降る。「次日十三日には、駿府の城を焼払給ふ。扱又駿河山西花沢の城に、今川家に弓矢功者の家老、小原肥前、遠州懸川に朝比奈備中、是も小原同然の侍大將なり」(『甲陽軍鑑』品三十四)。○朝比奈備中守 諱泰朝(やすと)、左京亮・備中守。生没不詳。駿河国今川氏の重臣で遠江国掛川城主。永祿十一年、武田信玄によって駿府を追われた氏真を掛川で防戦、翌年五月に講和、開城。氏真に従って伊豆国戸倉城へ、さらに相模国の小田原城に逃れたと伝える。(『戦国人名事典』)。○長谷川次郎左衛門「藤枝徳の一角に、長谷川次郎左衛門と申、有徳仁、是は粉川ほうゑいが子也」(『甲陽軍鑑』品三十四)。○懸川の城 掛川城。静岡県掛川市にあった城。朝比奈氏は代々ここを居城とし、今川義元の死後、徳川・武田両氏の挟撃をうけた今川氏最後の拠点がこの掛川城で、氏真は朝比奈氏とともに、徳川家康の攻撃に対してここで防戦したがつい

に開城。掛川城を手に入れた家康は元亀二年(一五七二)、石川日向守を配置した。○兵共ども「ども」は丁移り(三ウから四オへ)による衍字。○駿府の館 府中館(現静岡市城内・屋形町) 府中の館は応永十八年、今川範政が葉梨荘より移り駿河府中の地に館を設け、以来七代にわたり居館としたところであるが、永祿十一年十二月の武田氏の侵攻によって、府中館を一带とする地は焦土と化した。(『日本城郭大系』)。○大廈のかまえ 大きな建物。「大廈 タイガ」(書言字考)。○甲斐もなき…(歌意:正当な理由もなく、武田信玄の奸賊が欲の為に駿河国を倒してしまふのを見よ)(『鎌倉公方九代記』)。「甲斐もなき」は「甲斐無し」と「甲斐国」を掛ける。「大僧正」は僧綱のひとつで、僧正の上位。ここでは武田信玄のこと。「天文廿年 辛亥に、武田信濃守大膳大夫晴信法心なされ、「法性院機山信玄」と申す。…永祿九年ひのえ寅の正月元日より、七年の間ハ、一入清僧のごとくに、ごま・くわんじやうをなされ候て後は、びしやもんだうを御たてあり。大僧正になり給ふゆへ…」(『甲陽軍鑑』品第四)。「官賊」は奸賊の意。「するがの」は「為」と「駿河国」を掛ける。○軍「軍 イクサ」(諸節用集)。○かけおち 欠落。課せられたつとめに堪えられなくなつて、自ら放棄し、所属していた組織や土地から逃出すること。○大身 俸禄が多く高い身分であること。○旧功 永年にわたつて勤続し、功績のあること。○手をつかね 両手をびつたり組んで敬礼する意で、ことさらに恭順の意を表わした神妙な態度をとることをいう。「義貞已ニ鎌倉ヲ定テ、其威遠近ニ振ヒシカバ、東八箇国ノ大名高家、手ヲ東ネ膝ヲ不屈ト云者ナシ」(『太平記』卷十一)。○数年 多年。「数年 スネン」(易林本)。○天に背くまゝり、地にぬきあしす 世をおそればはかつて生きているさま。「相模次郎時行ハ、一家忽に亡シ後ハ、天ニ跑リ地ニ踏シテ、一身ヲ置ニ安キ所ナカリシカバ」(『太平記』卷十九)。「跑 セククマル」(倭玉篇)。「踏 ヌキアシ」(倭玉篇)。○垢たる鐘長刀 卷四一七「さび鐘」参照。「垢」で「さび」の訓みは未確認。穂のさびた鐘長刀の意。ここでは常日頃殆ど使われないことを示すため

の用字か。○年比「比年 トシゴロ」(書言字考)。○前後「前後
ゼンゴ」(易林本)。○とりまはし 取り囲むさま。○沽却 売る。
「Cogaacu コキヤク」(日葡)。○簀巻 人を簀で巻いて水中に投げ込
み、殺すこと。○打擲 人を殴打すること。「打擲 チヤウチヤク」(文
明本)。○蹂躪 踏みしめること。「蹂躪 ジウリン フミニジル」(易
林本)。○人夫「人夫 ニンブ」(饑頭屋本)。○引むくり「Miqunu
ムクル」(日葡)。○赤裸 まるはだか。「Acatacaca アカハダカ」
(日葡)。○しやつ あいづ。軽蔑して言う言葉。「Xacu シヤツ」(日
葡)。○高手小手 高手は腕の肘から肩にかけての部分。小手は肘から
手首までの部分。捕縛術のひとつで、嚴重な縛り方をいう。「高手小手
タカテコテ」(弘治二年本節用集)。「Tacte タカテ Cole コテ」
(日葡)。○古薦 薦は粗く編んだむしろで、乞食が寒さしのぎにかぶつ
た。「薦 コモ」(易林本)。○高天神の城 現静岡岡小笠郡大東町の鶴
翁山に築かれた要衝の城。「日本歴史地名大系二二 静岡県の地名」。
今川氏没落後、永禄十二年、徳川家康に属する小笠原与八郎が守って
いた。元龜二年(一五七二)三月、武田信玄は内藤昌豊に攻めさせた
が守りが固く撤退。信玄没後勝頼は天正二年(一五七四)四月、高天
神城を包圍。六月降伏。天正八年(一五八〇)十月になると、家康は
兵糧攻めの策をとり、翌九年三月城兵を撃破。「日本城郭大系 九」。
「天正二年……其年五月遠州高天神とて、小笠原与八郎と申家康寄騎の
侍、籠たる城有。此城を七月・八月両月の間二せめ取て、勝頼公甲府
へ帰陣被成。」(『甲陽軍鑑』卷八)「同年(天正三年)三月、高天神の
城、家康にとられ、番手の岡部丹波守をはじめ、ミナ家康がたへうち
とらるゝ。」(『甲陽軍鑑』卷二十)。○小笠原与八郎 諱は氏助。(のち
長忠とも)。生没年未詳。今川氏から家康に属し高天神城主。のち武田
勝頼に攻められて降伏。「家を継、高天神の城に住す。天正二年五月武
田勝頼居城をせむること甚急なるにより……勝頼味方に属せば加恩す
べきのむねをいひ贈る。氏助これに同心し志を変じて降参す。……武
田家没落の、ち小田原に通れ、北条氏政によりて鎌倉にかくれをる…

「狗張子注釈」(四)

：右府すなはち氏政をしてこれを誅せしむ。」(『寛政重修諸家譜』五六)。
「小笠原ハふじのしもかたにおひて、壹万貫の所領御約束にて、高天神
城をあけて渡ス。」(『甲陽軍鑑』品五十二)。○世の変をうかがい 世
の中の情勢の変化を探ること。ここでは、戦の状況を見て三浦に關す
る利害を窺うようす。○開のきて 開城して退く。籠城をやめて、城
を相手に引き渡し、他所へ退き移ること。○小田原 神奈川県小田原
市小田原城。氏真は掛川城退去の後、小田原城主北条氏政の庇護下に
置かれ、駿河の名目的支配権も北条氏直を養子にすることにより、氏
政に奪われてしまう。○人数「hinu ニンジュ(人数) 人々の数、ま
たは、大勢の人々、軍勢」(日葡)。○心変わり色に出たり 気が変わり、
叛意が表情に表れる様子。○城飼郡 遠江国の南東部に位置する。ほ
ぼ現在の小笠原に相当する。今川氏の領土であった。○からめ取り
捕らえて縛ること。○慮外無礼 ぶしつけ、もつてのほか、無礼、不
敬の意。○土民 その土地の人。庶民。「土民 ドミン」(諸節用集)。
○知行 幕府・諸領主がその家臣に与えた俸禄。○職を打ちあげ こ
こでは、職を取り上げること。○凡下 身分の低いもの。御家人、侍
といった身分を持たない庶民をいう。○機に入ぬれば 機嫌、気持ち
になうと。○取り立てつつ 目をかけて引き立て、登用しながら。
○君をくらし 君主の判断を誤らせる。○みだり 乱すこと。○冥
慮 神仏の配慮。計り知れない神仏の考え。○惡逆無道「Aauquacu
buo 邪悪なこと、または無法なこと」(日葡) 既出。卷四一八、卷四
一九。「無道 ムダウ」(諸節用集)。○命いけてをき 生きさせる。生
きたままにする。○娑婆ふさげ 既出。卷四一九。「娑婆をふさげ」。
世間場所をとって、生きていても何の役にも立たたためこと。その存
在が世間にとって無益な様。また、その人。○広庭 広く作つた庭。
武家造りでは、玄関先の広い庭。○情けなきはからい 残酷な処置。
○轂のごとく 過剰な様子。○よばひ 呼ばふ、喚ばふ。あたりに響
くほどに呼び叫ぶ様子。○足助長七 未詳。足助郷(愛知県東加茂郡)
に住した足助氏の系累か。○切手 首を斬る役の人。○鼻をそぎ片耳

を切て 刑の方法。「おつつき男女二千人はかりきりすて、其耳鼻を、そいで城中へふね一そうに入てぞおくられる。」(『信長記』七)。○心ばせ 心の持ち方。心がけ。氣立て。○佞臣 口先の達者な臣。言葉巧みに人に取り入る臣。○身をもみ足ずりして 身体をくねらせ、足を地に擦りつけて地団駄を踏む。転じて、激しく焦燥し、苦悶する様子。○声をはかりに 声の限りに。○太刀取 罪人の首を落とす役目の人。○搔首 首を搔き斬ること。刀を振り下ろして斬るのではなく、刃を首に当てて引つ搔きようにして斬ること。○完 肉、または切られた肉の塊。「肉 シ、ムラ 完 同」(書言字考)。○往來 「往ユク」(黒本本)。○弾指 つまはじきにする。「弾指 タンジ ツマハジキ」(弘治二年本)。○嘯 えらそうに大げさに言う。諸節用集。○果報 前世での行いが現世で現れるうちの善報。

【出典】『甲陽軍鑑』品十一、三十四。『甲陽軍鑑評判』『北条五代記』(富士2)。『鎌倉公方九代記』十二、二十一 松田修「仮名草子とその作家たち」(『日本近世文学の成立』法政大学出版局、昭和38・11)。

【類話】『王氏見聞録』「王承休」(富士2)。

【余説】本話に描かれている信玄の駿河侵攻めは、北条方から出る『見聞軍書』から『甲陽軍鑑評判』、さらに了意の『伽婢子』巻五―二「幽霊評諸將」においても扱われている(江本)。また、氏真・三浦右衛門のくだりは、『甲陽軍鑑』品三十三、『武者物語之抄』巻六一―一でもみられる。特に『甲陽軍鑑』では、「町人半分、侍半分の者あり。其子生つきよきとて、氏真の御座をなをさせ、三浦右衛門と名付、氏真は皆彼右衛門がままになり、…扱又五月ノ菖蒲斬を七月末迄た、きあわせ、能・猿楽・遊山・月見・花見・哥・茶ノ湯・川漁・舟遊、あけ暮ありて」とその奢侈ぶりが喧噪されている。また、品三十三には同じく名家に生まれながら家の没落をまねいた者として、「西国にて大内義隆、関東にて上杉則(憲)政、扱は今川氏真也」とあり、『甲陽軍鑑』の影響が色濃くみられる。

○*常田合戦甲州軍兵幽霊

*甲州東郡*恵林寺のおくに*真言の寺あり、*上求寺と名づく。本尊は*不動明王なり。*強盛忿怒のさうがうは、*放逸無慙のもがらをいましめ、本来*究竟の智剣は、*般若実理の性をしめす、*六賊四魔をのづから*降伏し、*四生五趣あめねく利やくし給ふ。その時の住持は、*頼胤阿闍梨とて知行兼備の徳たかく、*四曼相印の花の本には白馬*いな、き、*三密観行の月の前には青龍雲に吟ず。至極*上乘のこ、ろの底には*五部相応の玉をみがき、*瑜伽中台の胸の内には*三業即是の香をつ、めり。*効験掲焉の明匠也とて、諸人たうとひうやまひけり。*加持*護念*護摩*灌頂その功をあらはし、谷のひびきに應ずることし。

*武田信玄は国主なり、その*本卦すでに*豊の卦にあたり、本尊はすなはち不動なりとて、ふかく*信仰のおもひをかたふけ、いつも出陣の時はず上求寺にして護摩を修せられ、御館しづかに*軍勢無為、大将勝利のきたうをいたされ、信玄みづから参詣ある事、毎度の*成例なり。

*天文廿一年三月に、*越後の長尾景虎入道謙信は、千よ騎にて信州の*地藏峠のこなたまで、働らき出られ、*長尾義景三千よ*騎先手として押出たり。武田信玄一万三千の人数をもつて*馳向ひ、たがひに陣をはり、*足軽を出して迫合けれど*ばか、敷軍もなし。謙信いか、思はれたりけん、陣をはらひて越後に帰られたり。義景静に引て峠にあぐるを見て、武田がた*飯富兵部、*小山田備中、*郡内の小山田左兵衛、*芦田下野、*栗原左衛門佐、真先にす、みて義景を喰とむる。義景はすこしもおどろかず、甲州がたを*坂中まで引つけ、*手勢三千を只一手につくり、*大返しに取て返してた、かふに、武田がた立足もなく、坂より下へまくりおとされ、散々に切くつされ小山田古備中はうち死し、栗原、郡内の小山田は深手負て引か

ねたるを、武田方*籓本の前備*甘利左衛門、*馬場民部、*内藤修理かけよせて、向ふ敵を打はらひ突たをして、栗原、小山田をば肩にかけて、味方の陣につれて帰りしが、二人なからいくほどなく死けり。されとも義景は、武田の大軍に人数七百十三人うたれ、わづかに三騎に成て引帰す。武田かたにも三百七十一人うたれ、*手負は数しらず。軍は勝に似て、*歴々の*侍大将を失なひけり。此度の軍立にも、護摩を上求寺に修せられしに、*護摩木ふすぼる。*灑水にこぼれたりしかは、頼胤阿闍梨あやししくおもひながら、ふかくつ、しみて人にもかたられず。

しかる所に廿六日の*亥の刻ばかりに、鎧武者三百計、上求寺の門をつきひらきてかけ入たり。小山田古備中が声かとおほしくて、*軍兵を支配す。*寺中のあり合たる*同宿*小法師原おどろきあはて、縁のした天井の上にかくれたり。頼胤は*篤実の老僧にて少もおどろかず、軍勢の打入たるは、さだめて甲州方敗北して逃こみたりとおもひ、窓よりさしのぞきたれば、大庭に備をたてくるしげにみえたる武者も立ちならびたる所に、跡より又六七百騎もあるらんとおほしくて鎧武者*こみ入たり。打あひつきあひをし出し、こみいりてせめ戦かふ。*鋒より出る火は、沢辺の風に吹みたる、螢よりなを*か、やき、*馳ちがふ*汗馬のいきをひは、*雲井にとゞろく、*いかつちのごとし。かくて両陣*鬨の声をあげたりしかば、甲府の*地下人にこの声におどろき、すはや味方打まけて、敵軍追つめ打入たるぞとて、*俄にさはぎたちて、親は子の手をひき子は親をたすけ、*資財雑具を*かづきになふて逃かくる。御館の*留守居*典厩信繁、*穴山伊豆守*手の郎等同心被官三百人、太刀よ長刀よ、馬物具よとひしめき、しかも空すこしくもりて闇の夜なり、くらさはくらし松明*手毎にともし、上求寺にはせつきたりければ、門はきびしく閉て、軍は大庭のおもてに打合音*しきり也。*人々下知して戸びらを打やぶりかけ入れれば、今まで両陣一千よ騎にあまりし軍兵ども入乱れた、かふとぞみえしが、雪霜のきゆるごとく、皆一同に消うせて、只

松風の音のみ、梢に残れる計なり。

来胤阿闍梨あまりのふしぎさに、戸をひらき立出て、典厩穴山に*対面し、始め終りの有さま*ものかたりあり。*いかさま只事にあらざ、味方*をくれをとりにたりたるかと手をにぎり肝をひやし、御館に帰り*軍兵をもよをし、*軍立の*評定夜もすがら極められし所に、*微明に*飛脚到来してこそ、甲府は静まりけれ。うたれし敵味方まさしく*修羅の巷におもむき、*嗔恚我慢の業因にひかれて、かゝるくるしみをうけぬらん。*順現順生のまよひの有さま、さこそは悲しかるらめ。

信玄やがて*帰陣あり敵味方、うたれたる者どものため上求寺にをひて仏事をいとなみ*僧衆をくやうし、七日のうち経よみて跡をとふらはれしかば此後はこと故なかりしとかや。

○常田合戦 常田は現長野県小県郡。『甲陽軍鑑』『甲越軍記』では、「時田」。【余説】参照。○甲州東郡 甲斐の国中地域を三分した場合の東側、笛吹川以東地域をさす。国中は、甲府盆地一帯の呼称で、戦国期には、都留郡を郡内、富士川沿いの巨摩郡南部地域を河内と称するのに対し、それ以外を国中という。○恵林寺 既出。卷二一四参照。現山梨県塩山市小屋敷。臨濟宗妙心寺派。元龜四年(一五七三)四月、信玄は上洛の途次信濃駒場(現長野県阿智村)の陣中で没したが、遺言によりその死は三年間秘され、葬儀は長篠合戦の翌年の天正四年(一五七六)四月十六日辰刻、快川が大導師となつて当寺で盛大に営まれた。信玄の菩提寺として有名。○真言の寺 真言宗の寺。「真言宗」は高野山を開いた空海を祖とする。○上求寺 現東山梨郡牧丘山町倉科にある、真言宗醍醐派に所属する不動堂がそれであるという(磯貝正義・服部治則氏注戦国資料叢書『甲陽軍鑑』上)。「当卦の守本尊に、参詣有て、其後出陣被成候事、いつもなり、或時八卦の本尊、不動なりとて、恵林寺の奥、上求寺の不動へ、御まいり候」(『甲陽軍鑑』品

四)。**不動明王** 五大明王・八大明王の一つで、その主尊。大日如来が、いつさいの悪魔・煩惱を降伏させるために化現した教令輪身で、忿怒の相をとる。種々の煩惱・障害を焼き払い、悪魔を降伏して行者を擁護し、菩提を成就させ、長寿を得させるといふ。○**強盛忿怒** たいそう憤り怒ること。「強盛 カウジヤウ」(易林本節用集)。「フンヌ 忿怒 威猛にて怒れる義なり」(密教大事典)。「忿怒フンド フンヌ」(易林本節用集)。**放逸無慙** 既出。卷四一四。○**究竟の智劍** 「究竟」は最上・究極の意。「智劍」は仏語で煩惱を断ちきる清浄の智慧の力を劍にたとえていう語。○**般若実理** 法の実理を認識する最上の知恵。○**六賊四魔** 「六賊」は六境(色・声・香・味・触・法)のこと。衆生に煩惱を起させるから賊という。「四魔」は煩惱魔、陰魔、死魔、天子魔。○**降伏** 「Gobucu ガップク 悪魔を抑えること。あるいはあくまにうちかつこと」(日葡)。○**四生五趣** 「四生」は生物の生まれる形式四種、胎性・卵生・湿生・化生。「五趣」は衆生が業因によって赴くところ。地獄・餓鬼・畜生・人間・天上。○**頼胤阿闍梨** 頼胤は未詳。「阿闍梨」は密教では灌頂の職位を受けた最高の学位。「Arai アジャリ Xodo (聖堂)と呼ばれる Bonzos (坊主)の特定の意」(日葡)。**四曼相即** 真言密教の四種の曼荼羅(大・三摩耶・法・羯魔)が互いに融通して不離合一すること。○いなゝき 高い声で鳴くこと。「Hnaniquita. イナナキ、ク、イタ 日葡」。○**三密観行** 「三密」は真言密教で、身・口・意の三業(動作・言語・意念)をいう。○**上乘** 最大の教法。大乘のこと。○**五部相即** 五部は「五行」の意で、初めて真理を照見する四諦―苦・集・滅・道―の観行と、重ねてこれを修習する修道に相かなうこと。○**瑜伽中台** (梵 Yoga の音訳) ヨガ。呼吸を調えるなどの方法によって心を統一し、絶対永遠の理法と相即すること。中台に坐してヨーガの境に入っている様子。中台は寺院の堂内などで中央に設けられた台座。○**三業即是** 三業は心経・口業・意業。身体の動作・言語・意志の作用がびつたりと融けあい一致してこそなり。[Sango サンゴウ] (日葡) ○**効験掲焉** [Cognei カウゲン

(効験) ある物事の結果が現れること」(日葡)。「掲焉 ケチエン イチシルシ」(黒川本字類抄)。○**加持** 仏の力によって病氣・災難・不浄・不吉を除くための祈祷法。○**護念** 諸仏・菩薩・諸天・鬼神が、善を修する衆生からあらゆる魔障を除き護るように念ずること。○**護摩** 密教で焚火・火祭・火法の義。火を焼き火中に物を投じて祈願する、最も普通に行なわれている祭祀法。○**灌頂** 水を頭頂にそそぐ意。真言宗では秘密の法を伝授するとき壇上を設けて行なう。これを、伝法灌頂、受職灌頂といい、この受者を阿闍梨と称する。○**武田信玄** 既出。卷一一三、四一三、五一。○**本卦** 生まれ年の干支が一巡して数え年六十一歳になること。還暦。○**豊の卦** 八卦、ト筮(ぼくぜい)のうらかた。○**信仰** [Kingoシンカウ Xingoシンガウ] (日葡)。○**軍勢無為** 「軍勢」は軍隊の人数、軍隊の威勢の意。軍勢には変りはなく、死者も出ないでの意。○**成例** 「常例・定例」で、いつものしきたり、きまりになっている方法。「成例」の用例は未確認。○**天文廿一年三月** 一五五二年。『甲陽軍鑑』では「天文廿一年 壬子ノ三月」、『甲越軍記』にも「翌天文二十一年三月二日、春日山を発向あつて、同八日信州時田に着し、……」とある。○**越後の長尾景虎入道謙信** 既出。卷一―六参照。享祿三年(天正六年(一五三〇―七八))。戦国時代の武将。越後国の大名で、長尾為景の末子。天正二年(一五七四)年十二月剃髪し謙信と称する。○**信州の地藏峠** 地藏峠は、上州吾妻郡と信州小県郡との境、東筑摩郡と小県郡の境の二ヶ所にある。ここでは常田(小県郡田中町)に近い前者か。○**長尾義景** 越前守。『甲越軍記』(三一七)では、「正景」。初め義景、後に政景と改める。為景(謙信の父)の兄房景の子で、謙信の姉嫁。「政景 越前守 始六郎 永祿四年七月五日卒……」(『上杉家御年譜』)。「此長尾越前守正景は、越前守房景が子にて始め五郎と号す。」(『甲越軍記』)。○**先手** 既出。卷四一三、五一。先陣。○**馳向ひ** 馬を走らせて向う、急いで行く。[Faxemucal oia ハセムカイ、ウ、ウタ] (日葡)。○**足輕** 軽武装の下級歩卒。徒歩戦をする身軽な兵。騎馬士卒に対していう。○**ばかぐ敷** 「ば

は「は」の誤刻。○武田がた飯富兵部 飯富虎昌(おふとらまさ)。兵部少輔。甲州河内領飯富郷の旧族で、信虎・信玄の二代に仕えた譜代家老衆。信州佐久郡内山城主。永祿八年(一五六五)八月武田義信の失脚事件に連座して自害。「武田家の四老は甘利備前守、板垣駿河守信形、小山田備中守、飯富兵部少輔なり。……飯富は我より大敵強敵をも、我備先に楯つかせまじきとぞ存じつむる。」(『武家事紀』)。また『甲斐国志』(巻之九十六)では飯富兵部他、甘利左衛門、小山田備中守、馬場民部、内藤修理ら二十二人の名を挙げ、「希代の英雄」とする。『甲越軍記』では「飢富(オホ) 兵部少輔」とある。○小山田備中? 天文二二年。諱は昌辰。御譜代家老衆。「旗色されて見へず 七十騎」(『甲陽軍鑑』品十七)。その子昌行も備中守であることから古備中と称す。郡内小山田氏に対して石田(甲府市内)の小山田という。『甲斐国志』(巻之九十六)には、「備中守勇略アリ。且ツ首尾ノ術ニ勝レタルヲ以テ、……武田家ニ佳例トセシト云フ。……海尻・小諸城代ノ事アリ天文廿一年三月八日常田ノ役ニ死ス」とある。「備中守昌辰、武田信虎の四家老の一員と成て、信玄まで相勤、随分律儀に主命を重むじ下知を守て進退を其旨に任せ、守る処をいかにも堅固に持かためたる剛の者也」(『近史余談』一九五)。○郡内の小山田左兵衛 郡内は都留郡一帯。小山田氏は武蔵多摩郡小山田庄(現東京都町田市)の出身で、南北朝一室町期に甲斐国守護武田信満と婚姻関係と結んで武田氏とながり、一時離反したが戦国期には再び武田信虎と結んだ。信虎妹を母とする信有、その子信茂は、武田信玄のもとで多くの軍功をあげた。信茂に関しては、巻四一一「小山田兵衛」参照。○芦田下野? 天正三年(一五七五)諱は信守。「軍鑑二、芦田下野、天文・弘治中ヨリ本州ニ属シ、元龜三年二俣ヲ衛ル。天正三亥六月十九日、二俣ニ於テ病死ス。法名ハ昌林月桂息信ト一書ニ見エタリ。語録ニ名ハ信守又ハ幸成ニ作ル」(『甲斐国志』巻九十八)。○栗原左衛門佐 昌清。「栗原左衛門佐、とき田合戦に深手負、四十五日いきて死ス」(『甲陽軍鑑』品三十一)。○坂中 坂中峠のことか。坂中峠は高坂村枝郷坂

口新田村(現牟礼村大字坂口)と西条村枝郷坂中新田村(現長野市)との中間、三登山山稜の鞍部、標高八一七メートルの地点にある北国脇往還の脇、道坂中道の峠のことであり、坂中・坂口両新田村は峠の南北坂本にある集落である。○手勢 「てせい」テゼイ(手勢)自分の配下の兵士や軍勢(日葡)。○大返し 退却するようにみせかけ、途中で全軍が引き返して敵軍に反撃すること。○旗本の前備 陣立で、本陣の前に位置する軍勢。先陣。「義景地蔵到下へかゝるふりして、三千の人数を一手に作り、大返しといふ物に返して、一戦を始、甲州方の衆を、追たて伐くづし、競か、りてうちとり、小山田古備中討死する」(『甲陽軍鑑』品三十)。○甘利左衛門 甘利左衛門慰昌忠。? 永祿七年。御譜代家老衆。「旗白赤晴々 百騎」(『甲陽軍鑑』品十七)。○馬場民部 生没年未詳。馬場美濃守信房 御譜代家老衆。「旗白地黒山道 百廿騎」(『甲陽軍鑑』品十七)。○内藤修理 生没年未詳。内藤修理亮信豊 御譜代家老衆。「旗白地どうあか 二百五十騎」(『甲陽軍鑑』品十七)。○手負 撃たれたり切られたりして傷を負うこと。また、その者。「Teui テライ」(日葡)。「手負 テラヒ」(易林本)。○歴々 りっぱな人。偉い人。「歴」が重ねて用いられていることから複数と誤られて、りっぱな人々の意にも用いられる。「Required レキレキ 多くの尊敬すべき重立った人々」(日葡)。「歴々 レキレキ」(伊京集・天正本)。○侍大将 既出。巻三二三参照。○此度「此度 コノタビ」(易林本)○護摩木 護摩に焚く木。「Gomari ゴマリ」(日葡)。○ふすばる けぶる。「Fusobaru フスボル」(日葡)。○灑水 真言宗で、清浄を念じ、香水を灑水器に入れて壇場にそそぐこと。また、その水。「灑水 シヤスイ」(節用集大全)。○亥の刻 午後十時頃。○軍兵 兵士。つわもの。「Gumbio グンビヤウ」(日葡)。「軍兵 グンビヤウ」(饅頭屋本・易林本)。○同宿 同じ寺に住み、同じ師僧について学ぶこと。また、その人。「Dojuu ドウジユク」(日葡)。○小法師 修行中の下級の僧。「Codayi コバウシ 剃髪している子ども」(日葡)。○原 人を表わす名詞に付いて、複数をぞんざいに示す接尾語。冠者原、

雜人原。○こみ入たり 大勢の人がむりやりに、力ずくで入り込む。
「Comiru コミール」(日葡)。○鋒 刀の刃の最先端。○か、やき
既出。卷五―。○馳ちがふ 馬や車に乗ってあちこちに走り入りま
じる。「Faxechigao ハセチガウ 走りながら行き違う」(日葡)。○汗
馬 馬を走らせて汗をかかせること。「Camba カンバ」(日葡)。○雲
井 ここでは、空、宙の意。○いかつち かみなり。「Iazzuchi イカ
ツチ」(日葡)。○関の声 合戦で、開戦に際し、士気を鼓舞し、敵に
対して戦闘の開始を告げるために発する叫び声。○地下人 支配下、
または管轄下の土地の住民。領民。○資財雜具 「資財」は財産。資産。
「雜具」は家財道具。○留守居 主人や家人が不在のとき、その家を守
ること。留守番。○典厩繁信 武田繁信。大永四―永祿四・九・十(一
五二五―六一) 戦国時代の甲斐国の武将。守護武田信虎の次男で、信
玄(晴信)の同母弟。長じて後左馬助・典厩を称す。「甲陽軍艦」によ
ると、父信虎は嗣子晴信よりも次男の信繁を寵愛し、晴信を廃嫡する
動きがあったが、晴信が信虎を妹婿であった駿河の今川義元のもとへ
追放し、家督を相続した。その後、信繁は兄に従い国内で反乱は起こ
らなかつた。信繁は兄を助け各地を転戦し、武勇の将とされた。永祿
四年九月十日、越後上杉景虎(謙信)との信濃川中島合戦で戦死。三
十七歳。○穴山伊豆守 穴山梅雪。天文十一―天正十・五・九(一五四
一―八二) 戦国時代の武将で甲斐武田氏の一族。名は信君。左衛門大
夫、玄蕃頭、陸奥守を称し、天正八年(一五八〇) 除髪して梅雪斎不
白と号す。父は伊豆守信友、母は、武田信玄の姉南松院、妻は信玄の
女見性院。信玄、勝頼の二代に仕え、その領国経営に参画したが、居
地が駿河往還上の要地を占め、かつ今川氏とも姻戚関係にあったため、
特に対駿河対策に貢献した。天正十年三月武田家滅亡の直前徳川家康
に降り、同年五月家康とともに安土城で織田信長に謁し、ついで泉州
堺に遊んだが、六月二日本能寺の変を聞き、帰国の途中、山城国宇治
田原で一揆のために殺された。四十二歳。○手の郎等同心被官 「手」
は配下の意。味方の従者、家来のこと。郎等は、武士の従者の内上位

のもの。主家との血縁関係はない。同心は、戦国時代、大名の軍団の
下部に組織された武士。有力な武将との寄親と寄子の関係で、寄子を
同心とも呼んだ。被官は、隸属農民で、御館に労働力を提供し、土地
の付属物として、売買・質入れされた。○しきり 物事がひっきりな
しに続くさま。繰り返し起こる様。○下知して 指揮すること。命令
を下すこと。指図すること。○ものかたりあり ものがたりは、出来
事や物語を首尾や経過を含めて話すこと。ここでは、不思議な出来事
を語りきかせている様子。○いかさま いかにも、なるほどの意。相
手の言葉、もしくは先行の言葉を受けてそれを肯定し、相づちを打つ
語。○をくれをとる 勝負事や戦いにおいて後手に回ること。不利な
立場に立つて敗北すること。○軍立 戦闘の陣形、また戦法。○評定
作戦会議。方針の決定。○微明 未明。まだ夜も明けきらないころ。
夜明け前。「未明 ビメイ」(黒本本・饅頭屋本・易林本)。○飛脚 戦
国大名たちは、家臣や陣僧などに急用の使いをさせて、この称を用い
た。○修羅の巷 既出。卷三―六。修羅場のこと。闘争が激しい場合
に例えて言う。激しい戦闘の行われる血なまぐさい場所。○瞋恚我慢
の業因 憎悪と慢心による行為の原因のこと。瞋恚はいかり。我慢は、
おごりたかぶる心。業因は、この世の有様の原因となつて業。苦
楽の報いを受ける善悪の行為。○順現順生のまよひのありさま 業の
報いに翻弄される様子。順現は、順現受業のこと。現世にその報いを
受ける業。順生は、順生受業のこと。その報いを次ぎに生まれ変わつ
た世で受ける行為。○帰陣 戦争から帰ること。「Ugin キチン 戦争
から帰ること」(日葡)。○僧衆をくやうし 省略があるか。このまま
では意が通らない。僧衆が供養する意とする。
【出典】『甲陽軍鑑』品四、品三十。(富士2)
【類話】『玄怪録』岑順、『蒲湘録』瀚海神。(富士2)
【余説】当時、常田合戦はよく知られていた戦いであつたらしく、『甲
陽軍鑑評判』卷六「常田合戦」、『甲越軍記』三―七「時田合戦之事」、
『武辺咄聞書』(一四二) などの軍書類にもその話がとられている。特

に出版にあげた『甲陽軍鑑』とでは、朝倉義景三千に對する甲州方の侍大将飯富兵部・小山田備中・小山田左兵衛・菅田下野・栗原左衛門佐・甘利左衛門・馬場民部・内藤修理等の武田方武将将名をも一致する。

○男郎花

*越前国*朝倉家の*扈從*小石弥三郎は、顔かたち世にすぐれ、智恵かしく、心だて物しづかに情の色深く、愛らしき者なりければ、*傍輩*皆いとおしき人におもひけり。家の*足輕大将***洲河藤藏**とて、*武篇*かくれなき者あり。*弥二郎*を思いひそめて、*やるかたま*くおぼえて、

*身*にあまりをき所なき心ちして
やるかたしらぬわが思ひかな

かく思ひつゝけて、なぐさむるに、心只空にのみあくがれ、せんかたなく色に出つゝ、たよりあるかたに頼て、文つかはしける。

*芦垣*のまぢかき中に君はあれど
忍心や隔なるらん

思ひ堪なば、中々しぬばかりと、書つかはしければ、弥三郎これをよみて、限りなく心に染みてあはれにおぼえつゝ、返り事せしこと葉のおくに、

*人*のため人め忍ぶもくるしきや
身独りならぬ身をいかにせん

といひつかはしければ、藤藏いよ／＼心まどひ、思ひ乱れ、*今*はひたすら色に出つゝ、

*いかにせん*恋ははてなきみちのくの
忍ぶ計にあはでやみなば

*もらさじとつ、む袂*のうつり香を
しばし我身に残すともがな

神にかけ、命にかけて書つかはしけるに、*弥二郎*深き情の色にあらわれ、その夜忍びて逢にけり。千年を一夜にかたりあかし、*名残*のきぬ別れて出たり。藤藏かくぞよみける。

*ほどもなく身*にあまりぬる心ちして

をき所なき今朝の別れち

弥二郎聞て返し、

*別れ*ゆく心の底をくらべばや

帰るたもと、とまる枕と

又、いつといふ契りもさだめず、こと更今の世のありさま静ならぬ折ふしなれば、けふありて、明日をもしらざる今朝の別れや限りならましと、そのおもかげのしたはるゝもつきせぬうらみは数々なりとたがひに泣しほれたるばかり也。

次の日、*軍*おこりて朝倉義景人数を出して*白井峠*に*馳*向る。武田方せり合、たゝかふに、洲河藤藏うたれしかば、弥二郎大に悲し

み、命いきても何せんとして*軍法*を破り、*籬本*よりして、只一騎か

け出つ、うちしけるこそあはれなれ。二人のかはねは味方に取返し、

*日比*わりなく、かたらひし事、家中にかくれなかりしかば、人々あはれがりて、ひとつ塚に埋みけり。日を経てその塚より、名もしらぬ草の生出て、その莖立たるに夏にいたりて花咲たるを、是は*男郎花*とて世にすくなき草花なり。*さだ*めて弥二郎、藤藏二人の亡魂のしるしに生たる物なるべしとて、なさをしる人は根をわけて庭にうえしより、世にその草のたねおほく成にけり。

○越前国 北陸七カ国（若狭・越前・加賀・能登・越中・佐渡）の一

国。応仁の乱以後朝倉氏が勢力を伸ばし、北陸道の口にあたる。○朝倉家 朝倉氏、戦国大名。日下部を姓とし、平安時代末、宗高のとき

に朝倉を名乗った。「越前朝倉」巻一―三参照。応仁の乱以降、守護斯

波氏に代つて越前を支配。孝景は織田信長と対立、天正元年八月、朝倉氏滅亡。○扈從 貴人につき従うこと。また、その人。「扈從君主二

從テ行ク也（書言字考）。○小石弥三郎 未詳。○傍輩 既出。卷三
一六。○足輕大将 足輕隊を引率、指揮する者。足輕は普段は雜役、
戦時は歩卒となる者。○州河藤藏 未詳。○武篇 既出。卷一一五、
卷三二七。○弥二郎 二二は「三」の誤刻。以下、本文中に出る「弥
二郎」も同様。○やるかたなく 心にわだかままっていることのやり場
がなく。言いようが無く。○身にあまり…（歌意：我身に堪えきれな
くなってしまふ気持ちが出て、どうしてよいかわからなくなった私の
思いであることよ）類歌「程もなく身にあまりぬる心ちしておき所な
きわが思ひかな」（堀河院百首和歌）恋十首 思。「明題和歌全集」
『和歌題林愚抄』等所収。○せんかたなく すべき手段・方法がない。
仕方がない。○昔垣の…（歌意：間近い距離にいるあなたですが、私
の忍ぶ心が隔てとなっているのだろうか。いや、ならない）「昔垣」は
「葦垣」で、間を詰めて作ることから、「間近」の枕詞。類歌「あしが
きのまちかき程にすむ人のいつかへだてぬなかと成るべき」（六百番
歌合）恋五。『題林』『明題』等所収。○思ひ堪えなば中／＼しぬばかり
なり 想いに堪えきれなくなつたら、いつそのこと死ぬだけである。
○人のため…（歌意：あなたのため、人目を避けなければならぬの
は、苦しいことであるなあ。独りではない、あなたと一心同体の我身
をどうしましょうか）類歌「人のため人めおもふぞくるしきや身ひと
つならば身をもすてまし」。『題林』『明題』等所収。○今はひたすら色
に出つ、 心中の思いがすっかり顔色にあらわれ。○いかにせん…
（歌意：際限なくひたすら忍ぶだけで、あなたに逢わないうちに恋が終
わってしまうとしたら、どうしたらいいのだろうか）「みちのく（陸奥）」
は、現在の福島県・宮城県・岩手県・青森県。「忍ぶ」は、陸奥国の歌
枕「信夫」をかける。類歌「いかにせん恋ははてなき道のくの忍ぶば
かりにあはでやみなば」（『統拾遺和歌集』恋歌一）。『題林』『明題』『歌
枕名寄』『類字名所和歌集』等所収。○もらさじと…（歌意：逢つた
ことを人には言うまいと隠している袂のうつり香が、しばらく我身に
残っていてほしいなあ）典拠未詳。○ほどもなく…（歌意：すぐに我

身に堪えきれぬようになってしまふ気持ちがして、どうしてよいかわ
からない今朝の別れ路であることよ）類歌「程もなく身にあまりぬる
心ちしておき所なきわが思ひかな」（堀河院百首和歌）恋十首 思。
『題林』『明題』等所収。○別れゆく…（歌意：別れてゆく二人の心の
底を比べたい。帰って行く私の袂と留まって見送るあなたの枕と）「帰
る（かえる）」に「翻る」を掛けた。「翻る」は「袂」の縁語。類歌「わ
かれつる涙のほどをくらべばやかへるたもとととまるまくらと」（『統
拾遺和歌集』恋歌三）。『題林』『明題』等所収。○軍 既出。卷五一。
○朝倉義景 天文二年（一五三三）七三。越前の戦国大名。
孝景の子、母は隣国若狭武田氏の女。当初、越後の上杉謙信と攻守同
盟を結び、加賀一向一揆の挟撃をもくろみ、何度も加賀に出陣。永祿
八年（一五六五）將軍義輝が松永久秀に殺されると、弟の義昭を一乗
谷に迎え入れ、松永と対抗。しかし義昭を奉じて上洛する意志がない
ため、永祿十一年義昭は信長のもとに去り、信長の力によって上洛、
將軍となる。以後義景は、信長の天下統一のための最初の攻撃目標と
なる。「初延景 左衛門督 從四位下 ……天正元年右府近江国に出張
し、城々おほく降参せしかば、義景勢ひ尽、越前の居城一乗谷を避て、
大野郡山田庄に逃る。このとき朝倉景鏡も右府に降参し、敵兵国中に
乱入し、義景を捜し索る事急なり。八月二十日、大野郡堅松寺にをい
て自害す。年四十一」（『寛政重修諸家譜』第六六六）。○人数を出して
卷三二四「人数をもよほし」参照。大人数を出させて。○臼井峠
既出。卷三二四「笛吹峠」参照。碓氷峠。信濃、上野国境（現軽井沢
町と群馬県碓氷郡松井田町との境）にある峠。○馳向る 既出。卷五
一。○軍法 軍隊の規則。「軍法」ゲン ホウ（書言字考）。○旗
本 旗本。既出。卷五一一。本陣を護衛する軍勢。本隊。○日比わり
なくかたらひし事 「日比 ヒゴロ」（饅頭屋本）。ここでは、最近親密
に交際していること。○茎立たるに 茎がのびて。○男郎花 「男郎花」
は「をとこへし」で、植物名。「をとこべし」「をとこめし」とも。お
みなえし科の多年草。山野に自生し、女郎花に似るが、やや大形で、

葉茎ともに短毛密生し、花は白色である。季語、秋。「敗醬 ……時珍説ところの者は白花のものを指、即男郎花・をとこへし〈和名鈔〉なり。……をめし・おほとち・をとこをみなの花〈共に古名〉、とちな〈信州土州〉、みるな〈勢州〉、山野に自生多し。……皆短毛、臭気あり、円茎高さ四五尺、四月より秋に至まで白花を開く、黄花の者より大なり」〔重訂本草綱目啓蒙〕一二。○さだめて 明らかに、きつと。

【出典】未詳。

【余説】本話中には七首の和歌がみられるのだが、そのうち六首は作者の創作ではなく、先行する和歌の利用である。利用する和歌の初出は勅撰集等であるが、実際には中・近世に刊行された『和歌題林愚抄』『明題和歌全集』等の類題和歌集から選出し、物語の展開に即して歌の一部を改変するという方法を用いている。〈富士2〉。土屋順子『「狗張子」の和歌』（『大妻女子大学大学院文学研究科論集』9、平成11・3）。

○掃部新五郎通世*捨身

*上杉憲政の家人*掃部新五郎は手よく書て、歌の道をこのみ、情ふかき*武士なり。色このむとはなしに、わが心になふ人あらばかたらひ契りて、*後の世までも思ひはなれぬ心ざしをとげばやと思ひわたり、さだまれる妻もなし。かくて月日を送るあひだに、*久我がの住人*名草徳大夫とて、物ことやさかたなるものあり。その子*徳之丞は生年十四歳。田舎人の子といひながら*眉目うつくしく、そだちあがり心ざま優に、立ふるまひいやしからず。新五郎これを見そめてかぎりなく、縁をもとめて近づき、手ならひ指南疎からず、*四書五経までも*退屈なくをしへ侍へりしかば、父徳大夫も*秘蔵の客と思ひて、内外なく隔てぬにこそ侍へりける。

『狗張子注釈』（四）

とかくせしほどにたがひに思ひしみて、徳之丞新五郎とわりなくかたらひけり。歌の道までも*心ゆくばかりによみなし心ざしをつらねて月日を経るまゝに、弥生の比にや、家の軒ばに*忍といふ草の生出るを見て、新五郎かくそよみける

ことの葉に出てはいはじ軒におふる

忍ぶ計は草の名もうし

徳之丞心はやく思ひあたりて

*我もかく人も忍ひていはぬまの

つもる月日をなどかこつらん

*ことの葉の末の松山いかならん

波のしたにも我は頼まん

とをくかたらひふかく契りて徳之丞すでに十七歳卯月の初つがたより何となく煩らひ出し、さま／＼療治をいたせしかども露ばかりも駭なし。新五郎も身をもみて種々養生をくはへ、薬を用ひるのみならず、神仏に願だてし、*祈れども、ついにそのしるしなく、今は、や此世の頼もきかはてつ、*期待するより外なし。*一族手をにぎりいかゞせんとも思ひよる方もおほえず。かゝる所に徳之丞むくとおきあがり、くるしげなる中に、新五郎が手をとりにて

*すゑの露浅茅がもとを思ひやる

我身ひとつの秋の村雨

といふかとす*息はや絶にけり。

新五郎はかなしくあはれに心まどひ、おなじ道にと歎きけれども甲斐なく、野べの送りをいとなみ、苔のした塚のあるじとなし、塚の前にて髻をきり、宿にも帰らずすぐに遁世して、

*のがれてもしばし命のつれなくは

恋しかるべきけふの暮かな

よみて足にまかせて出にけり。西国のかたにおもむき、聞及びたる霊仏神社残りなくおがみめぐり、やう／＼年もあらたまり卯月のすゑつがたに故郷に立帰り、人しれず徳之丞が塚に行てみるに、草の茫々

として、露のみ*濃々たり。あはれ昔に成はて、おもかげはわすられず、涙ながら念仏する所に、塚のむかひに徳之丞か姿あらはれて影のごとく、*せう／＼として立たり。

新五郎入道、あれはそれかと近くよるに、かきけすやうにうせたり。心をしづめ経をよみて跡よくとふらひ、なく／＼又立ちかへり東国のかたに行けるを、世の中静ならず行きさきおほえしかば、今はながらへても何にかせんと*思ひうむじて、

*露の身のをき所こそなかりけれ

野にも山にも秋風ぞふく

と書て松の枝にむすびつけて、*あなしの池に身をなげて死けるこそあはれなれ。まのあたりしる人ありてかばねを水よりとりあげ、徳之丞が塚の前にも土中に埋みしとかや。

○捨身 修行あるいは報恩その他の事情で、自身を捨てること。○上杉憲政 ？一五七九。戦国時代の武将。山内上杉家最後の関東管領。上杉憲房の子。享祿四年（一五三二）管領となるも、後北条氏に圧迫され、弘治三年（一五五七）上杉景虎（法名謙信）を頼って越後に亡命、上杉家の重宝・系譜などを景虎に譲って養子とし、永祿二年（一五五九）景虎は上洛して將軍足利義輝の許諾を得、関東管領を称した。天正六年（一五七八）上杉謙信の死後、養子の景虎と景勝が家督を争い、景虎側についた憲政は、翌七年三月に景虎とともに斬殺された。「……しば／＼北条左京大夫氏康と合戦して利あらず。永祿元年九月つゝに氏康が為に没落し、平井城を去て越後国にいたり、長尾景虎（後輝虎又謙信）によりて上杉の称号をよび管領職を譲らむとす。……天正七年謙信が養子三郎景虎喜平次景勝と遺領を争ひ矛盾にをよぶのとき、三月十八日成怡これを和睦せしめむとてみづから春日山の館をいづ。景勝が軽率等あやまりてこれをかこみ、越後国四屋にをいて終に命を殞す。」（寛政重修諸家譜）。本話は憲政が謙信（長尾景虎）を頼る以前と推される。○掃部新五郎 未詳。○武士 「武士 モノ、フ」

（諸節用集）。○久我 下総国の古河か。○名草の徳大夫 未詳。○徳之丞 未詳。○眉目 「眉目 ミメ」（諸節用集）。○四書五経 四書（大学・中庸・論語・孟子）と五経（易経・書経・詩経・礼記・春秋）。○退屈なく 習う側が飽きない様子。ここでは徳之丞が飽きることなく新五郎の指南を受けている様子を描写。○心 ルビの「こ、の」は「ころ」の誤刻。○忍 「垣衣 かべのこけ 和名之乃布久佐・乃木乃之能布。……新古今 古郷は散る紅葉葉にうづもれて軒の忍ぶに秋風ぞふく 俊頼△按ずるに、垣衣は乃草類にあらず。只垣墻の苔なり。」（和漢三才図会 卷九十七）。○ことの葉に…（歌意：言葉に出しては言いますまい。軒に生えた忍草だを見るだけで私があなただを忍び恋うていることをことばに出せないことが大変つらい）類歌「おのづから忘るることの程もがな忍ぶばかりは草の名もうし」（題林愚抄）。○我もかく…（歌意：私も同じようにあなたを恋慕っています。互いに恋しながら、ことばに出さず、いたずらに過ぎてゆく月日をどうして過ごすだろう）類歌「われもつ、み人もしのひてとはぬまのつもる月日そかこつかたなき」（玉葉）。『題林愚抄』『明題』等所収。○この葉の…（歌意：言葉の末の松山を波が越すのはどんなだろう。波の下でも私は頼みにしよう）典拠未詳。○部分 四字程度版面摩滅して読めず。○部分 二字程度版面摩滅して読めず。○部分 四字程度版面摩滅して読めず。○部分 二字程度版面摩滅して読めず。○すゑの露…（歌意：末の露で濡れていないかと浅茅がもとを思い巡らす、私だけの村雨だよ）（『新拾遺』第十哀傷歌）。『壬二集』『明題』等所収。「浅芽」は丈の低いちがや。○のがれても…（歌意：遁世してもちよつとのあいだ命がよそよそしければ恋しいに違いない今日の暮れだなあ）典拠未詳。○瀼々露の一面に置くさま。○せう／＼ものさびしいさま。○思ひうむじて 考えあぐねて。○露の身の…（歌意：露のようにはかなく消えやすい私は身の置き所がない。野にも山にも秋風が吹いていることよ）（『千載』）。『新後撰』第十七雑歌上『題林愚抄』『明題』等所収。○あなしの池 武蔵国児玉郡阿那志村（現埼玉県児玉郡美里町阿那志）に

あつた池か。阿那志は阿奈志・穴師とも記す。(『日本歴史地名大系』
埼玉県の地名)。「阿那志村は阿那志郷の本郷にて若泉庄に属せり。：
永禄頃の文書にあなしと載せ、……天正十七年極月廿二日、是も北
条氏邦より香下彈左衛門へ出せし知行方の文書にも、五百貫文あなし
の内山田屋鋪と記せり。」(『新編武蔵風土記稿』卷之二百四十)。

○*蝟虫崇りをなす

*元和年中のことにや、*西国の侍*柳岡甚五郎某とて、*武篇に名
をえしもの、*大友が手に属して、*菌がねをならし、*時めきける
を、軍に*手を負つ、その身*合期しかたく*牢籠して、*山しろ
の里にすみけり。

その子を*孫四郎と名づく。年いまだ十二歳なりけれども、*心ざ
まおとなしく、おなじほどの子どもにも、つれてあそぶこともなく、
物静かに*生立あがり、*手ならひ、物よみに心をいれて、更に*い
やしげなる業なし。あたりちかき輩、みなこれをほめ、感じて*沙汰
し侍べり。しかも容顔美麗にして、人なみには、はるかにすぐれたり。
後には身をたて家をもおこすべしと、親もよろこび思ひけるところに、
*元興寺の*僧有快と聞こえし法師、都にのぼるとて、路のつゝで
に、しれる人ありて、山しろの里に立ちより、孫四郎が姿をみそめし
より、*心ざし切に思ひしみて、京へものぼらず。しばらくこゝにと
どまり、*たよりをもとめて、かくぞいつかわしける。

*江南の柳 窠にして緑なり 尚愛む 枝葉の陰 頻りに莅む
黄鸝の翼 暫く堪へて春の深きを待つ

*葉をわかみまだふしなれぬくれ竹の

このよをまつは、程そ久しき

と書きてやりければ、孫四郎おさなき心にもあはれとや思ひけん。
文をばふかく袂にかくし、返事せんすべしらずながら、朝夕*思ひ

くづをれつ、かくぞ読ける。

*おなじ世にいきて待とは聞きながら

心づくしのほどぞはるけき

宥快は此哥をつたえ聞きしより、心空にあくがれ、修行学道の事は
世の外になり。寺をあくがれ出て、山しろの里に行き通ひ、人めをも
わすれて、あたりちかく忍びありきけり。親聞つて、*情もしらず
腹立て、にくき法師の有りさまかな、孫四郎年まだたらぬを、みだり
にそ、のかし、とかくするこそ、*安からね。わが子更に門より外に
はいだすべからず。おとなしく生立なば、いかならん大名高家へもま
いらせ。武篇のはたらき、*人めをおどろかし、*大身に経あがり、
我がをとろへたる家をもおこさばやとこそ思へ。寺にこもり、*児喝
食となり、後には*乞食法師腰拔若党になりなば、命生て何にかはせ
ん。身を立る事のかなはずは、死たるこそよけれ。その法師あたりへ
もよすべからずと。をどりあがりていひの、しりければ、孫四郎悲し
き事限りなし。親にそむかじとすれば、なさけもしらぬ有りさま、鳥
けだものに同しかるべし。

*いかにせん あまのを舟のいかり繩

うき人のためつながら、身を

*独りかこちて明かし暮すと聞えしかば、宥快ほうしは思ひに堪かね
て

*あまのたく 藻塩の煙あぢきなく

心ひとつに身をこがすらん

口おしき世の有さまかな。ながらへてあればこそ、物うき事もつら
き事も、*我身にこりつむ柴舟の、こがれてのあかし暮さんより、死
してうらみをはらさんものと、一すぢに思ひさだめて、房のうちに
引こもり、*断食して居たりければ、同様の僧来りて、戸をた、くに、
しばしは音もせず。や、あり、てあら、かに障子をひらき、立出たる
すがたを見れば、瘦つかれたるすがた形。両の目は血を刺たるごと
く、くぼくとおちいり、頭の髪は此間に色変じて白くなり、筋ふと

く骨あらはれ、すさまじき事いう計なし。

同学の僧*さしよりにて、いかに浅ましくも執心ふかくみゆるかな。さなきだに生死のまよひははれがたくして、世々の聖賢だにおそれ給ひ、身命かへりみず、行なひすまして得道し給へり。その外おほくの修行者達、棲家をはなれ山にこもり、或は*諸国を抖擻し、行脚の身となり、*妄念をとどめ、煩惱を*ひするげて、まことのおこなひをいたし、*菩提をもとめ功德をつみてこそ、*輪廻をのがれ解脱のさとりに入といふに、大事の未来を余所になし、浮世の恋慕に思ひしづみ、*魔道に落て永きまよひに沈まん事、*人界に生れし甲斐もなく、*六道のちまたにさまよひなば、悔とも帰るまじ。只この一念をひるがへし、狂気をとどめて克念へ。*凡夫を転じて聖者とならんは、唯今ぞかし。*鏝湯・劍林遠からず、劍の山ちかきありと諫しかば、宥快聞て涙を流し、世に有りがたき*法門を聞させ給ふは、さる事なれども。思ひ結びし*業因はゆめゆめとけ侍へらず。千たび百たび心を返せども返され侍べらぬは力なし。逆此世は久しからず。重ねて受べき輪廻の妄執は、さだめて過去世の因果なるべし。柳園甚五郎は生々々怨家なるべし。たとひ死て劍の山には上るとも、よしや是までぞ。年比同学の情に、只今出て此世のいとまごひをするぞや。心ざしあらば後をとへかし。とくく帰りに給へとて障子を引きたて、もとのごとくこもりければ、僧も力なく、涙とともに帰られたり。

かくて七日といふに、*礼盤の前に打たれて死けり。僧衆あつまりて*戸を野へに出し、*茶毘の煙に焼あげ、経よみ念仏してとふらひけり。その夜孫四郎、夢ともうつ、ともしらず。宥快法に闖に入來るとみえし。それより病出し。時々熱氣にかされ、おとろき騒ぐ事あり。*医師を頼みさま／＼いたわるに、更に験なし。漸々につかれて。つゝにはかなく成たり。父母の歎きたとへんかたなし。泣々葬礼して、戸を土中に埋み、*卒都婆をたて、経よみて、とふらひけり。孫四郎今引入とおほえし時に。まさしく宥快ほうしが聲として、孫四郎殿いざ／＼といふ声の家の、天井に聞えしこそおそろしけれ。

*三十五日をすこしける。ころは五月の初めつがた。家のうち天井・*承塵、戸にも柱にも、毛虫のわき出たり。五月雨の降つゞく故に朽たる木竹より、わき出るやと思ひけるに、それにはあらで。甚五郎が家にかぎりて、余所にはひとつもなし。拾ひよせ、掃あつめて堀にすて河に流す事、*数石に及ぶといへども、跡よりわき出て、つくる事なし。後には此毛虫にさわる人は、是にさ、れて*疼痛み、日を経ては*蛻けて蝶になり、むらがり飛で、人の顔にとまり、衣裳に取つき、夜るはともし火にたかりて、うち消し、あるひは食物の中ころび入れは、いかさまは只事にあらず。宥快法師が亡魂のなすわざ成べしとて。元興寺に申つかはし、同学の僧を頼みてとふらはせしは、彼僧も痛はしくおぼえて、祭文を作りて佛事をいとなみ、ねん比にこそ申らひけれ。

維れ歳*元和二年、*龍集丙辰今日、元興寺の住僧宥快名を*釈門に入り志を学道に凝す。*観智温雅の徳、修行練磨の功、実に*出離の要基也。一朝魔風扇動して、*禅座散落し、*安塵*飛蕩して、*定水垢濁し、神裂け魂砕け、死して蛆と為る。嗚呼哀哉、*細爾の小虫害を為すこと、少なからず。汝が毛は攢起して*豪の如く*刺端兩岐にして鼠の若し。

*晋の桓温が鬚に喩へ*准陽王がみ矢に比ぶ。熱き則んば*展ること*水蛭の如く、寒き則んば縮まりて巻に似たり。蓋し惟生死輪廻の巻、*流転因果の報、*罪福各符の如し。*緘茶咸差ふことなし。*三界四生区に別れ、*六道*七類凡て殊り、一念の愚執、一心の惑倒、変じて迷ひと為り、化して物と為り、*賈誼は所謂化して異類と為ると。

*清涼の所謂精神化して土木金石となる。此故に*八幡の娘嬢子は女郎花と為り、*松浦の佐夜姫は豎る頑石と成れり。*愛恋染著する則んば、情と非情と為らざる所無し。嗚呼哀れなるかな。汝が業力假令強盛なりと雖も、今行ふ所*随求陀羅尼。*光明真言庸て誦供し、式て加持す。応に速やかに迷情を転じね疾

く魂精を翻し、安穩の樂城に至るべし。謹んで奉よ尚て享よ。かくおこなひ加持して。とふらひをければ。二三日の間に蝟ことごとく絶て。あらかたなくぞ成りにける。亡魂のうかひける事、うたがひなし。

○蝟「蝟」は、はりねずみのこと。○元和年中 一六一五—一六二四。近世ごく初期。○柳岡甚五郎 未詳。○武篇 既出。卷一—三。○西国 九州地方。○大友が手に属して 豊後(現大分県ほぼ全域)の国、大友氏に仕えていた、の意。なお大友氏は吉統(よしむね)の時、文禄の役の過失で、豊臣秀吉に改易されている。○齒がねをならし 鋼・刃金をならず。武勇を奮う。○時めきけるを 名をあげていたが。○合期しがたく おもうようにならず。○牢籠して 浪々の意。○山しろ 山城。畿内五カ国の一つ。現京都府南部。○柳岡孫四郎 未詳。後のルビは「ヤナオカ」。○心ざま 氣だて。○生立 既出。卷二—四。「そたち」の訓みは用例未確認。○手ならひ 手習。ここでは和文(学)の手ほどきを受け、「物よみ」(漢学)にも力を入れて示す。○沙汰 噂。評判。○元興寺 現奈良市芝新屋町にある寺院。現高市郡明日香村の飛鳥寺(別名法興寺・大法興寺・元興寺・元元興寺)が平城遷都にともない、養老二年九月二十三日に奈良の京内に別寺院を建立したことに始まり、旧寺名の通り飛鳥寺ともよび、新元興寺とも称した。○宥快 未詳。○ころろざし切に 思慕の情が一途に湧いてきて。○たよりをもとめて つてを求めて。○江南の柳… 類詩未詳。江南に生える柳はたおやかで緑がうつくしい。さらにかわいいのは、枝葉のかけからみえかくれる鶯の翼である。もう暫くすると、春が深くなりいつそう美しくなるだろう。の意。○葉をわかみ… (歌意: 葉も若々しく節の成らない呉竹のように幼ないあなたが一人前に成長される時を待ちわびるのはとても長いことだ) 類歌「葉をわかみまだふしなれぬくれ竹のこはしほるべきつゆのうへかは」『六百番歌合』『題林』「幼恋」、『明題』(八二五)等所収。○思ひくづをれつ、落胆

して気弱になりながら。○同じ世に… (歌意: 同じ世界に生まれながら待ってくださると聞いて知っているのに、遙か遠くまで物思いの限りを尽くすことです) 類歌「おなじ世にいきて待つとはききながらこころづくしの中ぞかなしき」『題林』「恋遠人」(七二二二)、『明題』(八二八二)等所収。○情けもしらず 「情」は男女間の情愛を示すが、ここでは、男同士の間を喚起する、注目させて驚かせる。○安からぬ 不安だ。○人めおどろかし 注意を喚起する、注目させて驚かせる。○大身に経あがり 身分・俸禄の高い武士に出世する。○児喝食 児は、寺院で学問を教わりながら僧に給仕した、貴族・武家などの少年。男色の対象ともなった。喝食は、寺の大衆に食事を知らせ、食事時に湯、飯などの名を唱える役を務める僧。後にはもっぱら、小童がつとめ、稚児と同義となった。○乞食法師 生活を保つために在家を回って食物を乞う僧のこと。こじき僧。○いかにせん… (歌意: いったいどのようにしたらよいのであろう。あまの小船の錨の縄につながれているように、つれないあの人につながれたこの身は 類歌未詳。○独りかこちて明かし暮す 「かこつ」は、満たされない気持ちを抱いて嘆く意。恨み言を言いながら嘆き暮らし。○あまのたく… (歌意: あまのたく藻塩の煙のように甲斐もない この心ひとつで恋に身を焦がしていることです) 類歌「あまのたくもしほの煙わがたになびかぬこひの身をこがすかな」『続後撰和歌集』(七五四)。『題林』「煙寄恋」(七五三六)、『明題』(八六二二)等所収。○我身にこりつむ柴舟の「こりつむ」は、木を伐採して積む。「柴舟」は、柴を積んだ舟。ともに和歌に用いられ、「なげきこりつむ」などのかたちで用いられる。嘆きが積もる意。○さしよりて 近づいて。○諸国を抖敷し、行脚の身となり 抖敷は卷一—六既出。煩惱を打ち捨て、仏道を求め修行に励むこと。特に行脚の意。行脚は、僧が諸国を巡って修行すること。煩惱をうち捨て、仏道を求め修行し、諸国をめぐって修行すること。『前田本字類抄』「僧侶部」に「抖敷 トウソウ」あり。○ひすろげて すれて薄くなる。すれて弱まる。「磷 ヒスラグ」(易林本) ○菩提をもとめ功德をつみ

て 悟りをもとめて善行による得を積み重ねる。○輪廻をのがれ解脱のさとりに 迷いの世界に生死することをのがれ、真実を悟ること。○魔道 悪魔のような悪い行い。○人界 人間界の略。苦楽半ばする生存の境地。この世。○六道のちまた 既出。卷四―二。衆生が業によって生死を繰り返す六つの世界。地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道。○凡夫 迷えるもの。愚かな人。○鑊湯劍林遠からず 鑊湯地獄と劍林地獄。鑊湯地獄は、鑊で煮られる地獄。劍林地獄は、劍を葉とした樹がある地獄で、罪人がこの地獄に入ると大風が吹いて、劍の葉が身体の、頭、顔などを傷つけるという。○法門 仏語、諸仏の教法。仏の教え。○業因 苦楽の報いを受ける原因となる善悪の行為。○礼盤 仏に礼するためにのぼる座。須弥壇の正面にある。○尸既出。卷四―四。○荼毘の煙 死骸を火葬したその煙。○医師 『和名類從抄』に「醫 久須之」とある。○卒都婆 板に塔の形の切れ込みを入れ、死者の追善のために墓側にたてる板塔婆。○三十五日 死者が亡くなった日から数えて三十五日目に忘明けの法要を行う。○承塵 母屋と廂とを限る柱の間の上と下に渡した化粧の横木。『黒本本節用集』に「長押 ナケシ 或作 石漢云承塵 セウチン」○数石 一石は一斗の十倍。約百八十リットル。○疼 ひりひりすること。「疼ヒ井ラク」(倭玉篇)。○蛻けて 脱皮すること。○元和二年 一六一六。○龍集 一年。多く年号の下に記す語。○釈門に入る 仏門に入る。○觀智温雅 觀智は、一切の事物を觀察してその本源を悟ること。温雅は、人や物の有様、性格などがおだやかで上品であること。しとやかであること。○出離 輪廻を逃れ、悟りの境地に至ること。○禪座 結跏趺坐。座り方の一つ。静坐法の一つ。両足を組み合わせてすわること。仏は必ずこの坐法による。○妄塵 塵は対象のことで、色・声・香・味・触・法の六つを指す。これらは虚妄名心によって現れたものであるというのでこういう。○飛蕩 飛は、とばす、ちららす意。蕩は、洗い清める意。○定水垢濁 定水は、定心を静かな水にたとえた語。定心のように静かな水。垢濁は、垢がつき穢れること。

垢と穢れ。○細爾 いかにも小さい様。非常に小さいさま。○豪「やまし、」の訓みは諸節用集に未確認。○刺端両岐 刺は、痛に通じる。鋭いトゲが屹立する意。○晋の桓温が鬢に喩へ「桓温」は晋の龍亢の人。南康長公主に尚す。蜀を伐つなど、内外の大権を集める。後に、燕を征して敗れ還り、帝を廢して簡文帝を立て、密かに篡奪を謀るも未だ成らずして病死する。幼くして優れた骨相を具えていた。『天中記』二十二「鬢鬚」に、「鬚毛、桓温少與沛劉恢善快、常称之曰温眼如紫石。稜鬚以鬚毛磔、孫仲謀晋宣王之流」。○准陽王がみ矢に比ぶ「准陽王」は漢の高祖の子。名は友。「み矢」は未詳。○展る のびる。「展ヒロク ノフ マコト」(倭玉篇)。○水蛭 ヒル類の一種。両端は細い。環節があり、体が伸縮する。○流転因果の報 迷い続けること。生まれ変わり死に変わって迷いの世界をさすらうこと。○罪福各符の如し 罪と福は、割符のように隣あったものである。○織芥 細かいごみやちり。転じてわずかなこと。○三界四生 三界は、凡夫が生死往來する三つの世界。欲界・色界・無色界。四生は、四種類のあらゆる生き物。その生まれ方の相違で四つに分類する。胎生・卵生・湿生・化生。○七類 未詳。○賈誼 既出。卷一―五。前漢、洛陽の人。二十歳で文帝に仕え、礼楽を興そうとするも、大臣に疎まれ、長沙に左遷された。のちの梁の懷王の太伝となった。○清涼 清涼国師、澄観。唐代の高僧。華嚴宗第四祖。○八幡の娘嬢子は女郎花と為り「藻塩草」卷八「女郎花」によると、平城天皇のとき、小野頼風という人があり、八幡に住んで京の女のところに通っていた。しばらく男が通ってこないで訪ねてみると、男に新しい女ができていたので八幡川のほとりに着ていた山吹色の衣を脱いで身投げしてしまった。その衣が朽ちて女郎花となって咲き乱れたという。○松浦の佐夜姫は豎る頑石と成れり 松浦佐夜姫伝は『万葉集』、『肥前国風土記』にあるが、夫の帰りを待ちわびて石と化したという伝説ではなく、鎌倉時代に撰述された『十訓抄』中巻第六ノ二十二、に万葉・風土記に加えて『幽明録』より引くとあり、望夫石伝説の説話が語られる。○愛恋染著する

染著は、俗世間に染まり、之に執着すること。また、俗世間のこと。恋愛におぼれる様を表現した言葉。○随求陀羅尼 随求菩薩の真言。衆生のそれぞれの求願を成就させる効果のある陀羅尼。○光明真言 大日如来の真言。この真言を受持するものは、光明を得てもろもろの重罪を滅し、宿業・病障を除き、智慧弁才・長寿福業を得る。

【余説】

祭文については、『伽婢子』「守宮の妖」に同じ趣向あり。

○杉谷源次付男色之弁

*文禄三年の事にや、*伊勢の国国司の家に、*深見喜平とて*才覚利口の侍、よく奉公をつとめて、知行三百貫までとりあげ、*外様をゆるされ、*興までもめしければ、漸やく*重きものにぞ成にける。奥がたの*屬性杉谷源次といふ者は、すぐれて*眉目うつくしかりければ、喜平心をかけて、とかくいひけれども聞かれず、あまりの事に文をかきて、源次がたもとなげ入たり。中々こと葉はすくなくして、

*伊勢の海あら磯によるうきみるのうきながらみるはみぬにまされり

*あなかしし人にちらすな、忍ぶの杜のこと葉もれなば影浅き*井手の玉水、心のそこも波にあらはれては、未までもいかせん書やりけるを、源次いかと思ひん、只かりそめのやうに、*傍輩に泄し語りしかば、家中にかくれなく聞渡りて*沙汰あり。喜平は人のみるめ恥かしく、源次が返事せぬまでこそあらめ、人に*泄しけるこそ安からぬ、さだめて我を失なはんと謀るとおぼえたり。命ながらへばいか成見くるしき果にやならんと*ねたく恨み、源次朝とく起あがり、寝屋より出る所をあえなく*打よつし、みづから腹切て死けり。諸共に塚に埋みしに、夜な々その塚に火もえて、日暮ればそのあたりは、人の通ひも絶たり。

国司此事を聞き給ひ、悪き有さまながら、執心のほどもいたはしく、僧をやとひて、塚の前にて経よみとふらひければ、その火それよりもえず成たり。国司*法力の*奇特を感じて、彼僧をめして*法門など聞給ふつるでに、*男色の事は*経論にもみえ待べるかと問れしに、僧こたへてかたられしは、仏教の中には、わきて男色といふ説はなく、*邪淫戒のうちに*非道淫戒をあげられしに自からこもり侍べり。

もろこしには*周の*穆王の慈童を寵じ、*漢の*高祖の*籍孺を愛し、*惠帝の*閔孺を執し、*哀帝の*董賢を幸せられ、*衛の*弥子瑕、*漢の*鄧通、みなこれ男色にまどへるためしなり。*史記に*依幸の伝あり、*太平通載に*権幸の篇あり。*晋書には、*西晋の*武帝・*咸寧太康の年より、男寵の事大に興りて、女色よりも甚はだし。あるひは夫婦離別にいたり、おほく怨をおこす事ありと記せり。

是にいしへより依幸のともがら、その終りを善するものは少なし。夫財をもつて交はる者は、財尽て交はりたえ、色をもつてまはるものは、花落ちて愛*磷ろぐとかや。人常に若き時なし、年の暮やすき事は、たとへは流る、水のごとし、行て又帰らず。たとひうつくしくみやびやかなるすがたといへども、いく程なく過去去て留まらず、すみやかに衰ふる。猶*朝顔の日影待まの有さまならずや。*梁の*沈約が懺悔の文には、*追尋す少年のときは血氣まさに壮なり、*習累の纏とところ*排、豁がたし、*淇水上宮まことに幾もなし、桃をわかち袖を断。またおほしといふに足り、是実に生死の牢絆、いまだ洗ひ拔易からずといへり。宋の世にいたりて学問をこととし、此道稍をとるへたり。

本朝のむかし、*真雅僧正は*業平を恋て、

*常盤の山の岩つ、じ

いはねばこそあれ

とよみをくられし。中古に瓜生判官の*弟義鑑房が金崎にて打死し、*麟岳和尚の*田野にして打死せし、みな男色のまどひに陥りたる

故なり。近比は、*股をさし肘を引て血を出し、心ざしの実ある事をあらはせり。古き哥に、

*思ふこゝろ色にはみえず身を刺て
朱の千入を君それとしれ

をかしげなる哥よみ詩をつくりて、愛まどひ侍べり。文にもあらず武にもあらず、非道の色に身をすて命を失なふもの、女色よりも甚はだし。忠をわすれ徳をけがし、家をたをし身をほろぼす計。僧俗にわたりにてかくのごとし、まことに慎むべき事なりとぞ語られける。

○文禄三年 一五九四年。豊臣秀吉政権の時期。○伊勢の国司の家
伊勢国司は代々北畠氏であつたが、永禄十二年（一五六九）織田信長は木造氏が国司具教に背いたのを契機に伊勢国に進攻し、次男信雄を具教の子具房の猶子とさせ、天正三年（一五七五）家督を譲らせた。翌四年具教は信長に自殺させられて、伊勢国司の北畠家は滅亡した。〔国史大辞典〕 ○深見喜平 未詳。○才覚利口 頭の回転が早く、即座に適切に事に対応できる能力を持つこと。○知行 Chikyo 千ギヤウ（知行）領地に同じ（日葡）。○外様をゆるされ 外様は表面きの所。公的な場所をさすことが多いが、この場合は対外折衝のことをいう。○奥までもめしければ「奥」は主人及びその家族が住む居室で、ここでは奥まで出入りが許されて、の意。○重きもの 重鎮。○屬性 既出。卷五―三。「小姓（性）」に同じ。「小性 コシヤウ」（諸節用集）。〔Coxo Coxoxu コシヤウ またはコシヤウシユ（小姓または小姓衆） 近習の者 または身分ある召使（日葡）。○杉谷源次 未詳。○眉目 目にみえるありさま。特に人の顔かたち。容貌。「眉目 ミメ」（諸節用集）。○伊勢の海…（歌意：伊勢湾の波の荒い磯に寄せ浮いている海松ではないが、想い人であるあなたを見たがためにつらい思いを味わうとしても、見ないよりは見た方がいい）類歌「いもがしまあらいそによるうきみるのうきをもみるは見ぬにまされり」（『夫木和歌抄』二十八、『六百番歌合』恋一）。『和歌題林愚抄』「明題和歌

全集』「歌枕名寄」等所収。「みる」は「海松布（みるめ）」に同じ。「海松布 ミルメ 磯べ 浜伝ひ 芦やの浦 汐（シホ） 波 南の風 真砂（マサゴ） 地 髪 いせの海」（『類船集』）。海草類の総称。○あなかしこ人にちらすな忍ぶの杜…（文意：ああ、人にはもらさないでくれ、忍ぶの杜のように心の奥底に隠しているあなたへの深い思いを、もし言葉がもれてしまつたら、あなたの面影が残っている底浅い水が波にさらわれてしまうように、私の思いも無駄になつてしまうから）「忍ぶ」に「信夫」をかけた。「信夫の森」は陸奥の歌枕。岩代国、今の福島県福島市。前半は、類歌「ちらすよなしのぶのもりのことのはに心のおくの見えもこそすれ」（『新拾遺和歌集』恋歌二）。『題林』「明題」『類字名所和歌集』等所収。後半は、「むすばんと契りし人をわすれでやまだ影あさきみ手の玉水」（『六百番歌合』恋五）。『題林』「明題」『歌枕』等所収。○井出の玉水 井出は山城国の歌枕。現京都府南部の地。○傍輩 既出。卷三―六。○泄し「泄 モラス」（諸節用集）。「ヒジヒミツヲ ホカニmorasu（モラス）」（日葡）。○沙汰 既出。卷五―五。○ねたく「ネタクNekau（如く）すなわち、恨めしく、またはくやくしく 文章語」（日葡）。○打よつし 本文「よつし」は「ころし」の誤刻と思われる。○法力 仏法の力。仏法の威力。〔Fonqi ホウリキノリノチカラ 掟の威力、つまり効能（日葡）。○奇特 既出、卷一―三。神仏などの不思議な力。靈験。奇蹟。〔Qidou キドク不思議。奇蹟（日葡）。○法門 既出。卷五―五。○男色 男性が少年を性愛の対象とすること。「男色：按ズルニ、男色ノ甚シキ者ハ女色ニ勝ル。而レドモ久ニ耐エザルナリ。筍ノ甘美ナル、纒ニ一旬ヲ過レバ則チ膚硬ク節高クシテ、噉フ可カラザルガ若シ。』（『和漢三才図会』第一〇）。〔Nanxou ナンシヨク（日葡） ○経論 三藏の中の経蔵と論蔵。〔Qion キヤウロン 経論（日葡）。○邪淫戒 仏語。五戒の一つ。夫婦でないものの性行為、または夫婦も行つてならない性行為に對する戒め。不邪淫戒。○非道淫戒 ここでは、男色を制する戒め。○周中国古代の王朝。前一〇〇年～前二五六年。○穆王 周五代皇帝。

○慈童 穆王に寵愛された侍童。○漢 「漢」は前漢(一)。二一〇年間。○高祖 漢を創始した皇帝。劉邦。○籍孺 漢の高祖に寵愛された美少年。『史記』(卷百二十五)など。○惠帝 孝景帝。漢二代皇帝。劉邦の長子。劉盈。○閔孺 惠帝に寵愛された臣。○哀帝 漢の十二代皇帝。劉欣。○董賢 前二十三(前)一年。哀帝に寵され大司馬衛將軍に至ったが、哀帝の死後に免職され、妻とともに自害した。(『漢書』卷九十三(董賢傳))。○衛 周代の諸侯国の一つ。前二〇九年、秦によって滅ぼされる。○弥子瑕 衛の靈帝の臣。その艶色によって寵される。【余説】参照。○鄧通 漢の文帝によって寵愛される。○史記に佞幸の伝あり 「史記」は中国の正史、百三十卷。前漢の司馬遷撰。二十四史の第一。「佞幸」は、へつらつて、相手に気に入られること。追従もの。「佞幸 雜部 ネイカウ」(色葉字類抄)。○太平通載 『太平広記』(宋の李昉(りほう)等選九七八年成立)のことか。同書に「権幸の篇」(二八八)がある。○権幸の篇 権勢があつて君寵をほしいままにした者の列伝。○晋書 中国二十四史の一。晋の正史。○西晋 二六五年(四二〇年)。○武帝 西晋を建国した皇帝。○咸寧大康 西晋の年号。二七五(二九〇年)。○女色 女との情事。いろごと。じよしき。によしき。[Gioxou]ヂョシヨク 女性にたいする性的欲望(日葡)。「宋書ノ五行志ニ云フ、男寵ハ晋ノ感寧大康ノ時ニ起ル。女色ヨリ、甚シ。是レ陰陽乱レタルナリ。」(『和漢三才図会』第一〇)。○磷ろぐ 「磷ヒスラク」(饅頭屋本)、「磷 ヒスラク」(易林本)。○梁 五〇二年(五五七年)。中国、南北朝の南朝第三の王朝。○沈約 梁を建国した武帝の臣。晋書・宋書・齊記等の編者。○朝顔の日影を待 出典未詳。○懺悔が文 「懺悔Sangue サンゲ」(日葡)。出典未詳。○追尋 「ツイジン」(文明本)。○習累 諸節用集に用例未確認。○排豁 「豁」で「あきらむ」の訓みは、諸節用集に未確認。○淇水上宮まことに幾もなし 淇水(河南省林県東南の臨淇鎮に発し衛河にそそぐ川と、(河南省濬県の西にある地名)を指すか。「幾 イクバク」(黒本本)。○宋の世 中国南北朝時代、南朝最

初の王朝による治世。四二〇(四七八年)。○真雅僧正 延暦二十年(元慶三年(八〇一(八七九))。平安時代前期の真言宗の僧。貞観寺僧正とも呼ばれた。讃岐国は多度郡の人。本姓は佐伯直。父は佐伯直田公、空海の実弟。空海の入京が許された大同四年(八〇九)に九歳で上京し、空海が「勸縁疏」によって密教宣布を行つた翌年の弘仁七年(八一六)に、十六歳で兄空海に師事し、真言を学ぶ。承和二年(八三五)には勅によって弘福寺別当となり、嘉祥元年(八四八)六月に権律師、同年九月に律師となる。仁寿三年(八五三)十月に少僧都、斉衡三年(八五六)十月に大僧都に任ぜられた。貞観二年(八六〇)に東寺長者、同六年二月には僧正となり、法印大和尚位を授けられた。○業平 在原業平。天長二年(元慶四年(八二五(八八〇))。平安初期の歌人。六歌仙、三十六歌仙の一人。『伊勢物語』の主人公とされる。○常盤の山(歌意：常磐山の岩に生えているつつじのように、目立つことがなく言葉に出して言わないからこそ人にはわからないことではあるが、やはりあなたが恋しいのですよ)類歌「思ひいづるときは山の岩つつじいはねばこそあれ恋しきものを」(『古今和歌集』恋歌二)。「歌枕」『類字名所』等所収。○瓜生判官 瓜生保。越前国の豪族で建武中興に新田義貞に従い、延元二年(一三三七)二月の越前金崎城の攻防戦で戦死した。○義鑑房 瓜生保の弟。僧籍にあつたが実兄瓜生判官の拳兵を助け、義に殉じた。前出瓜生判官ともども、『太平記』卷十七(十八)に描かれている。○金崎 金崎は福井県敦賀西方の古城で、足利尊氏と新田義貞軍との激戦地。義鑑房は金崎の戦いで兄の瓜生判官とともに討死、その地を敦賀市檜曲(かしまがり)と伝える。『伽婢子』卷十一「守宮の妖」に、義鑑房が美童の新田義治を想い義兵をあげて討死したという話がある。○鱗岳和尚 「軍鑑二、府中二大立寺云々。皆十妙心寺派ノ濟家也トアリ。又大竜寺鱗角和尚(景德院牌面二角ヲ岳ト作ル)ハ、勝頼ノ従弟ナリ」(『甲斐国志』卷四十五)。○田野 山梨郡田野(現山梨県東山梨郡大和村)。天正十年(一五八二)、武田勝頼が自害した地。これにより武田氏滅亡。勝頼に関しては、卷三十三

参照。「勝頼公へ鎧を三本つきかけ、しかも御のどへ一本、脇の下へ二本つきこみ、おしふせまいらせて、御頸を取り候」（『甲陽軍鑑』品五十七）。○股をさし肘を引「腕を切り、足の腿を突きやぶるもあり」（『田夫物語』）。○思ふこゝろ…（歌意：私のあなたを思う気持ちは人目を忍んで表に出すことができないので、この真っ赤に染まった血を見て私の燃えたぎったあなへの熱い思いを知って下さい）典拠未詳。

【出典】『新語園』二―四三。

【余説】漢代歴代の皇帝の男色については、『史記』『漢書』の「佞幸伝」に詳しい。一例を挙げると、「昔以色幸者多矣。至漢興、高祖至暴抗也。然籍孺以佞幸。孝惠時有閔孺。此兩人非有材能。徒以婉佞貴幸、與上臥起。」（『史記』佞幸列伝）。本話に登場する董賢の話は古くは、『続古事談』巻六にもとられている。男色のおこりを漢朝からときはじめ、本朝の男色の話題にうつるという趣向は、江戸時代の衆道論書・男色物によくみられる。衛の霊公に寵愛されていたという弥子瑕（「衛霊之時、弥子瑕有寵於衛國。」『韓非子』難）は、本文中ルビ「ビシカ」が正しいが、『心友記』（寛永二十年刊）（『衆道物語』と改題）、『よだれかけ』（寛文五年刊）では、「ヤシカ」とする。真雅僧正が業平を恋慕い和歌を詠んで贈ったというくだりは、『よだれかけ』巻五、『岩つつじ』（延宝四年成、正徳三年刊）、『東海道名所記』巻一、『好色訓蒙図彙』中にもみられる。

本話中では五首の和歌が使用されているが、その多くは作者の創作ではなく、先行する和歌の利用である。和歌の初出は勅撰集等であるが、実際には中・近世に刊行された『和歌題林愚抄』『明題和歌全集』等の類題和歌集から選出し、物語の展開に即して歌の一部を改変するという方法を用いている。（富士2）。土屋順子『「狗張子」の和歌』（大妻女子大学大学院文学研究科論集）9、平成11・3）。